
魔法少女リリカルなのは～舞い降りし翼～

どら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜舞い降りし翼〜

【Nコード】

N8859L

【作者名】

どら

【あらすじ】

何故か知らないが神様（仮）に殺されてしまった俺。で、予想どおりな『転生』

しかも行き先は『魔法少女リリカルなのは』の世界。

俺は神様（仮）から貰ったチート能力で原作ブレイクやってやんよ！！

処女作です宜しければ温かな目で見守ってください。

ブログゝ長すぎたる！ゝゝ（前書き）

初投稿です。

宜しければ読んでやってくださいm┐┐m

ブローグ〜長すぎたる！〜

真っ白な場所。

何もない空間。

そこには音もなく…いや、音（声）は聞こえている。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい…」

先程から、一人の女性が土下座して俺に謝っている。

察しの良い方（読者の皆様）なら、お気付きだろうが説明しましう。

俺こと『たかみねりゅうと高峰龍斗』（18歳）は神様（仮）により、誤って殺されてしまったらしい。

『らしい』と言うのも、俺はその時の記憶が欠落しているとかで覚えていない。

（まあ思い出せないものはしょうがないが、この後の展開ってやつぱり『お約束』のアレなのか？）

と、一人でそんなことを考えている間も神様（仮）は謝り続けているわけ…。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい…」

はあ。話が進まないから、そろそろ声かけるか。

「あゝ…もおわかりましたから、取り合えず顔を上げてください」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい…」

「いや、ですから俺も別に怒ってるわけじゃないですから」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい…」

（ふむ、これでは何も進展しないままプロローグ終了の可能性も出てき…？）

俺は、ふとあるものを見つけた。

それは、神様（仮）の腹の辺りから見えるプレイヤーらしき物体。

（まさかな…）

俺はそう思い、少し右にずれて屈んで見ると…。神様（仮）はラジカセらしき物体を抱えて土下座しなから寝ていた。

（……さて、ここは素直にキレて良いよねw）

俺はとびっきりの笑顔で、神様（仮）に全力で拳骨をくれてやった。

ゴスー！！

「いつったああああい！！何すんのよ！！」

「黙れこら！！てめえ、いい加減にしろよ！！」

人の事、勝手に殺して素直に謝ってるかと思えば、録音再生ループ流して寝てるとか俺の事おちよくってんのか！！」

「…てへ」

「てへ つじゃねえ！！その首へし折るぞコラ！！」

俺はそお言つと、神様（仮）の背後に素早く回りチョークスリーパーをかけた。

「はうつ！！ごつごめんなさい！！今度はホントに謝るから！！
つて、絞まつてる！！ギブ！！ギブ！！」

俺は仕方なく、神様（仮）を解放してやる。

「で？俺はこの後どうなるんだ？」

神様（仮）は、自分の頭を撫でなが上目遣いに答えた。

「貴方には、別の世界で転生してもらおうわ。

元々、私が誤って貴方を殺してしまったんですから」

「なら、行き先と何らかの特典があるなら教えてくれ」

と、俺が返すと少し驚いた様子を見せる神様（仮）。

「貴方、前にも死んだことあるの？何だか順応し過ぎなんだけど」

「いや、何となくそんな気がしたから聞いてみたんだが。マズかったか？」

「んゝ…まあ良いわ。んじゃ、これか貴方の転生先とそこでの立ち位置について説明するわね」

と言い、神様（仮）は俺に向き直って話し始めた。

（ん、実はちよつと可愛いか）

「まず、貴方の転生先は『魔法少女リリカルなのは』の世界。ここについての知識は？」

「一応、無印〜stsは見たから知ってるぞ。
てか、何で神様（仮）がりりなの知ってたんだよ？」

「あら、当然じゃない。だって私もアニメ好きだもの。
特に深夜帯の作品はね」

「成る程、あんたもオタクか」

「当然じゃない。って、神様（仮）って何よ！！私には『アテナ』
って名前があるんだからね！！」

「いや、自己紹介がなかったからな。最初に神様だったのは聞いたが、その後すぐに土下座して寝てたし」

「うゝ。…ま、まあいいわ。で、貴方はりりなのA S の辺りの飛んでもらうは。」

そこで、原作を静観するも良しブレイクするも良しよ」

成る程。なら、俺のやることは闇の書から『リーンフォース』と『八神 はやて』を助けるって辺りが妥当か？
え？何でかって？その方が楽しいだろ（笑）

「で、俺の能力は？」

「勿論、チートおkよ」

おいおい。この神様（仮）改め『アテナ』マジで話わかってんじやん。

「なら、身体強化と魔力、気を測定不能（EX）それからデバイスはイテリジェントとユニゾンの二つ。バリアジャケットはVF-25F（アルト機）アーマードバック装備みたいな感じでフェイスガードは無しの方で。それと、変形機構も排除。でアーマードがあるから翼は展開できないんでウイング0カスタムの翼を付けてくれ。58mmガンポッドも装備で。これは速射追尾型の魔力弾をトリガーを引くことで発射するタイプでマイクロミサイルや反応弾は俺の魔力を凝縮して打ち出す。目標到達前に破壊された場合、その場で爆破し煙幕としても使用可能。

インテリジェンスは1stが大剣でイメージはダイゼンガーの斬艦刀。

2ndが双剣でイメージはサンドロックのヒートショーター。

3rdがライフルでイメージがウイング0のツインバスターライフル。

4thが太刀でイメージがモンハンの夜刀【月影】。

因みに、デバイスのモードが上がる毎に技の威力も上がってく感じ

で。
んで、外見はガンダムWのデュオ。あと様々な能力解放時は瞳が金色に輝く」

と、俺が一通り注文を終えると啞然とするアテナを見た。

「……えっと、それで全部？てか、無茶苦茶チートじゃない！！身体強化ってどのレベルよ。寧ろ強化の必要無いんじゃないの？」

「いや、最低でもサイヤ人並の身体能力にニュータイプも欲しいな。なんせ、向こうでは戦闘なんて日常茶飯事だろ？」

「はあ……。わかったわよ。

それだけのチート星人なら、どこに行っても無敵ね。それと、デバイスの名前は決めてあるの？」

「ああ。ユニゾンが『リア』でインテリジェントが『ナハト』だ。」

名前の由来なんか考えてない。単に『何となく』で決めたのは内緒だ。

「おっけ～。てことはユニゾンは女性型でインテリジェントは男（？）で良いの？」

「ああ。リアの外見は美人なら誰でもいいアテナに任せる。
あと、魔法なんかはご都合主義全開で俺の思いのままに何でもありの方向で」

「はあ、まあ良いわ。んじゃ、向こうに送るわね。デバイス何かも向こうに着いたら一緒に居るから」

アテナはそお言つと徐に右手を上げた。
そして…。

「じゃ〜ね〜」

俺の足元には漆黒の穴。

まさか!!

「やっぱりか〜〜〜〜!!」

俺はその穴の中に落ちていった。

「ふう〜。しかし、深夜アニメ見てて間違えて死亡名簿に名前載
せちゃったなんて、流石に言えないわよね〜。

ま、かんばんなさい『血塗られし忌み子』。

いえ、今は『純白の翼』ね」

しかし、この事故事態が必然であったことを、知る者はまだいない。

ブローグ〜長すぎたる！〜（後書き）

いかがでしたか？

次回は原作介入開始です！！

宜しければ、ご意見ご感想お待ちしております。

海鳴市に降り立つも、今後の計画がない事に気が付いた今日この頃（前書き）

連投です。実は作者は何も考えずこの作品を書いているので、色々読みにくいかと思いますが生暖かく見守って下さい

海鳴市に降り立つも、今後の計画がない事に気が付いた今日この頃

「あの糞アテナの奴、いきなり落とすか普通」

俺は愚痴りながらも、現在の状況を調べるべく回りを見渡した。

（ここは公園か？となると、原作であの感動の舞台になった場所しか思い付かねえな）

ま、原作どおり海も見えてることだしまちがないだろおと決めつける。

「で、デバイスも近くに居るって話だけど」

「マスター？いかなさいましたか？」

と、俺の背後から女性の声が聞こえた。

俺は振り返り…固まった。

そこに居たのは一騎当千の『孫策 伯符』激似の美女。

いや…まさかね。

「もしかして、『リア』か？」

「はい マスター、お待ちしております」

いやいや。ちょっと待とうかセニョールてえ事は何か？俺はこれから彼女とずっと一緒に事かい？わふー！！

「私も居るのですが、お忘れですか殿？」

と、俺の耳元から声が聞こえた。てか、耳から？

「もしかして、このピアスは『ナハト』か？」

俺は耳朶に付いたクロスのピアスを触りながら聞いた。

「はい。私は貴方のインテリジェントデバイスの『ナハト』です、お見知りおきお」

おー！！何か、ナハトかけー！！こいつ、將軍に仕える侍を勝手にイメージしちゃったぞ。

…だけどそれって、あの戦闘狂バトルマニアと同じ思考って事無いよな？

「ところで、リアここがどこだかわかる？」

「はい　ここは地球の海鳴市ですよ。」

因みに、現在の時刻は14：33ですマスター　」

「成る程。んじゃ、取り合えず家に帰って、今後の計画を練るとするか」

と言って歩き出そうとしたとき、俺はあることに気が付いてリアとナハトに尋ねた。

「なあ、お前等さ俺の家が何処だかわかる？」

「さあ？」

「存じ上げませんな」

ヒュユユ…。

いや、マジで困った。何かいい方法は無いものか。

取り合えず、ここに居ても仕方がないので移動。
しかし、宛があるわけでもないので只今放浪中。

いやはや、どおすっかな。

??? s i d o

「海美市にて巨大な魔力反応を感知
います?」

艦長、いかがなさ

「そおね、 さんと 執務幹に向かってもらいましょう」

「わかりました。って、聞いてた? 君 ちゃん」

「「はい」「」

「じゃ、宜しくね」

??? s i d o a u t

龍斗 s i d o

「いや、マジでどおすっかな」

宛もなく歩いてやって来たのは海。

取り合えず、体育座りして海でも眺めるか。

「マスター、お気を確かに」

「殿、我等の力量不足面目ない」

リアとナハトが何やら落ち込んでる様子だ。

いや、アテナに生活に関すること何も言わなかった俺が悪いんだけどさ。

「いや、お前等は悪くないよ。

しかし、どおしよ。流石にこの容姿じゃ部屋借りるのもバイトするのも無理だしな」

因みに今の俺の容姿は10歳前後。

流石にこの見た目では日本の法律上無理があるよな

「さて、悩んでも仕方が無いんだけど、お客が来たみたいだな」

俺はそう告げると立ち上がった。

「リア、お前は俺のポケットの中にいる。
手の内は成るべく出さずに起きたい」

「わかりました、マスター」

「ナハト、相手の出方を待ってから、仕掛けるぞ」

「御意」

そして、俺の前に転移して来たのは…

つて、ありゃクロノとフェイト？なぐんであの二人が現れるかね？
取り合えず、驚いとくか？飛んでるし。

「人が飛んでるよ。手品か何かか？」
と、俺が惚けていると。

「ふむ。君は魔導師を見るのは初めてかい？」

なぐんで、シスコンKYが聞いてきた。

龍斗 s i d o a u t

フエイトsido

「ふむ。君は魔導師を見るのは初めてかい？」

クロノは警戒を解いて彼に話しかけた。

私はまだバルディッシュを彼に向けて構えている。

（バルディッシュ、どお思う？）

（彼がロストログアの不正所持者で有ることは、アースラのセンサーで確認済みです。となれば、彼は何かしら隠していると思われるます）

（うん。そおなんだけど、何だか変わった感じの子だなって）

彼は私と同じ位の歳に見える。

でも、何だか近寄りがたい雰囲気醸し出している。

クロノも何かを感じたから、いつものチョット高圧的な感じではなく普通に話しかけたのかな？

フエイトsido aut

龍斗 s i d o

「魔導師…ね。」

で、その魔導師さんが俺に何のようだ？」

（ま、何となく予想はついてるけどな。俺の魔力とリア、ナハトに
気付いたってどこか？

にしても、一番面倒なのに引っ掛かったな。これなら、魔王かは
やてんに接触しとくんだった）

何て事を考えていると、K Yが何か言ってきた。

「君が持っているロストログアをこちらに渡してもらいたい。

それは本来、君のような一般人が持つものでは無いんだよ」

「一般人ね。なら、俺に勝てたら持つてきな。

ナハト、セツト・アップ！！」

俺は右耳のピアス（クロスのみ）を外し叫んだ。

そして、まばゆい光に包まれて現れた俺の姿はメサイア（顔や間接
部以外）そのものだった。

「うほ マジでメサイアじゃん。バルキリーの癖にこの重装甲にウ
イングゼロの翼。か、萌え…もとい、燃えるねえ」

俺は右手に持った、58mmガトリングポットの銃口をクロノに向

ける。

左腕には1stの斬艦刀もといナハトを持って担いでいる。

「やはり、君も魔導師だったか！！なら、話は早いロストログリア不法所持及び公務執行妨害で君を逮捕する！！」

（ておい！！クロノ微妙に交戦的だぞ。こんな奴だったっけ？）

クロノもS2Uを俺に向ける。

フェイトもバルディッシュを構え直した。

俺は内心この状況を楽しんでいた。

（いやはや、俺は一体この後どおなるのかな？）

（マスター、楽しそうですね）

（殿は戦闘狂の気があるやもしれんな）

はてさて、今後の展開はいかに

海鳴市に降り立つも、今後の計画がない事に気が付いた今日この頃（後書き）

さて、次回はフェイト&クロノvsMr.チート。

ここから物語は動き出します！！

では、次回もお楽しみに！

戦闘？そんなもんフルボッコに決まってるじゃー！（前書き）

初の戦闘です。読みにくいかもしれませんが、宜しければ読んでや
ってください。

では、始まります

戦闘？そんなもんフルボッコに決まってるじゃー！！

俺は、ガトリングポットをクロノに向け連射していた。

「けっ！！監理局の魔導師ってのは、防戦一方の腰抜けか？
そんなんで、俺を捕まえられると思ってんのかよ！！」

クロノは障壁を張り俺の攻撃を防いでいる。

俺はスラスターを使い左右に小刻みに軌道を変えながら、クロノに攻撃の隙を与えなかった。

（ま、フェイトが挟撃してくるはず）

と、クロノの後方に待機していたフェイトが俺の右翼に回り込み仕掛けてきた。

「フォトン・ランサー！！」

そうフェイトが叫ぶと、10本程の雷の矢が出現し俺に向かってきた。

俺はそれを脳内でロックオン（イメージ）して、叫んだ。

「マルチミサイル、ファイアー！！」

その瞬間、俺の両肩や胸、両足のアーマーが開き無数のミサイルを吐き出した。

龍斗 side out

フェイト side

「マルチミサイル、ファイアー!!」

彼がそう叫ぶと、彼の全身から無数のミサイルが発射される。
私は、それを上昇して避けようとした。

(何て数なの？フォトン・ランサーじゃ、半分も防げない)

私は、これが質量兵器出はないのがせめてもの救いだと思った。
実際、これ程の火薬が爆発すればいくら海上とは言え、被害が出ないとも限らない。

(結界は張ってるけど、でも安心できないもんね…!?)

と、交わしたと思っていたミサイルが上昇して私を追尾してきた。

(誘導タイプ!?だめ、追い付かれる!!)

未だ、クロノは彼の猛攻から抜け出すことができずにいた。

フェイト side out

龍斗 side

俺はクロノへの攻撃の手を緩めること無く、フェイトへと向かったミサイル群を目で追っていた。

（やつべ〜。あれじゃ、フェイト追い付かれんな。障壁張っても、動けなくなつて手詰まりになるだけだろうし。しゃ〜ね、自分でやったんだけど助けるか。実際、二人とも弱すぎて興ざめしちまつたし）

俺はそう思うと、直ぐ様フェイトを追つて上昇。

フェイトとミサイルの間に割つて入った。

そして、ガトリングポットをフルオートで発射。

（にしても、流石高起動型だな。さっきの位置からここまで、軽く150m位あんのに一瞬かよ）

と、俺がそんな事を考えていると自分で発射したミサイル（約50発）は消滅していた。

「あゝ…やめやめ。お前等はつきり言つて弱いし遅せえし、戦つても楽しくねえや。」

取り合えず、任意での事情聴取位は付き合つてやるからそれで手え打ってくれ」

龍斗 side out

フェイト side

私は、ミサイル群に追い付かれると思い障壁を張ろうとした。

と、私の前に突然人影が。

すると、追ってきたミサイルがその人影の放つ魔力弾によって、次々に撃ち落とされて行く。

一方は正面から相殺、また一方は軌道を変え回避しようとしたけど、追い付かれて爆散。

（え？何で彼が？

だって彼は今、クロノと…）

と、クロノの方を見るとそこには彼は居らずキョロキョロと辺りを見回しているクロのがいた。と、彼が私に背を向けたまま言った。

「あゝ…やめやめ。お前等はつきり言って弱いし遅せえし、戦っても楽しくねえや。」

取り合えず、任意での事情聴取位は付き合ってやるからそれで手え打ってくれ」

と、実際に彼は私よりも早い。でも、弱いって言われるのには納得
いかない。

クロノもそう思ったらしく、彼に向かって叫んだ。

「確かに、君は早いかも知れないがそれだけだ！！
これなら、動けないだろ！！」

クロノはいつの間にか、彼にバインドを掛けていた。
これで形勢逆転。私はそう思った…。でも。

フエイトside out

龍斗side

クロノが、俺の方を見て叫んだと思ったら両手両足にバインドを掛
けてきた。

（おいおい、んな卑怯事やっちゃまって良いのか？）

俺は、別に慌てるでもなく考えた。それは、バインドを解く方法。
チートのお陰で、俺は様々な魔法を考えるだけで仕える。

いや、自分で考えるって面倒だけど仕方ないか。

（いや、無理矢理引きちぎりゃ良いか）

と、俺は魔力を放ちながらバインドを無理矢理引きちぎった。

「おいおい言っただろ？お前等じゃ、俺には勝てねえよ。そもそも、ぶっ倒すのがお前等の目的か？」

俺は少し殺気を込めて言い放った。

後ろにいるフェイトが、ビクツとなった気がするがここは無視だ。クロノも多少怖じ気付いたのか、一歩引いたように見えた。

「それによ、俺帰る場所無くて困ってんだよ。

保護してくれるってんなら、そっちの要望も聞いてやつから。

どおだ？別に悪い取引じゃねえと思うんだけど？」

俺がそう言つと、クロノは何か考えてる様子だ。

ま、俺も急にンな事言われても『はい、そうですか』ってなるとも思わねえけどな。

（ま、これがダメだったら速攻逃げるぞナハト）

（心得た。しかし殿、何故ゆえに全力での戦闘を避けただけで無く、あのオナゴを助けたのです）

（ん？あゝ…やっぱ、女に手え上げんのは抵抗あるんだよ）

（マスターは優しいんですね）

と、俺がナハト達と念話でそんな話をしているとクロノが。

「わかった。実際、君には色々と話聞きたい。僕たちと一緒に来てもらう」

あらま、案外あっさりと話が進んじまった。
ご都合主義？当然！！

「お〜け〜。んじゃ、案内宜しくな。
え〜っと、名前教えて貰っても良いか？」

知ってるけどね！！

「ああ。僕はクロノ・ハラオウン。
で、君の後ろにいる彼女が…」

「フェイト・テストロッサ」

「クロノにフェイトか。俺は高峰 龍斗だ、一応よろしくな」
と、簡単な自己紹介を済ませ俺たちは転移した。

時空管理局が保有する戦艦『アースラ』へと

この時、俺は気付いていなかったが今が『闇の書』の事件が発生する一週間前であつたらしい。

いや〜、アテナが言っていた『A S I』の辺りって、全然初っぱなからかよ！！

この出会いが、俺達の長く険しい戦いの日々の始まりだった。

後に、ハーレムの始まりとも誰かが語っていたが気にしない!!

戦闘？そんなもんフルボッコに決まってるじゃー！！（後書き）

初めまして、作者の『どら』です。

今回、初めて戦闘を書いてみたのですが…難しいです。
自分の実力の無さに、泣きそうです。

ですが、頑張っ書いていこうと思います。

宜しければ、皆様のご意見・ご感想お待ちしております。

では、次回をお楽しみに！！

今回、クロノは空気でした（笑）

人、それを『ご都合主義』と言う（前書き）

更新遅れて申し訳ありませんでした！！

諸事情により不定期投稿になりますが、可能な限り急ぎますので。

では、「人、それを『ご都合主義』と言う」

始まります

人、それを『ご都合主義』と言う

ここは、アースラ艦内の会議室。

今、俺は聴取を取るために待機中。

何でも、上官を呼んでくるとかでクロノがブリッジに向かった。
ともすれば、自然の流れでフェイトと二人きりになるのは必然であると思うわけです。はい。

「・・・・・・・・」

ま、フェイトはさっきから無言で俺を見ているのだが、俺の顔なんか見て楽しいかね？

フェイト side

クロノがリンディさんと呼びに行ってる間、彼を見ていて欲しいって言ってきた。

実際、アースラに着いてからの彼は大人しかった。

最初こそ、キヨロキヨロと辺りを見回していたけど、今は腕を組んで静かに椅子に座っている。

（でも、さっきの戦闘では一度も本気を出さなかった。
彼の本当の實力っていったい。）

私は、バルディッシュをギツユッと握った。

フエイトside out

龍斗side

にしても、この時期にアースラが地球に来てたのには助かった。
このまま、野宿か魔王若しくは八神低でご厄介になる事になったら、
色々と被るとこだったな。

（で、俺達はいつまで待ってれば良いんだ？）

俺がそんな事を考えていると、よおやくクロノ&リンディさんにア
ルフ、エイミイがやって来た。

と、リンディさんが俺の問面へと腰をおろす。
それを確認して、他の三人も座った。

俺は全員を見回した後、口を開いた。

「んで、俺に聞きたいことってなに？
答えられる範囲でなら、話すよ」

まあ、神様（仮）から転生してこの世界に来ました。何て言えないけどな。

「まずは、自己紹介させて貰うわ。私はリンディ・ハラオウン。この艦の艦長をしているの。
で、こちらの子が・・・」

「私はエイミィ。クロノ君の執務補佐官よ」

「アタシはアルフ。フェイトの使い魔」

まあ、知ってるけどな。

「俺は高峰 龍斗」

で、こいつが俺のデバイスのナハトと・・・おい、リア出てこい」

「はい。マスター」

俺の胸ポケットに入っていたリアが出てきて、俺の肩に乗る。

因みに俺の今の格好は、白のYシャツに黒のVネックのシャツ、裾の広い黒のジーパンにスニーカーといったラフな格好。

こつちに来た時には、既にこの格好だった。

「で、俺の素性とこいつ等の事が聞きたいってことで良いのか？」

「ええ。話して貰えるかしら？」

と、リンディさんが聞いてくる。

（てか、本当に若いな。これで子持ちつてあり得ん）

そんな事を考えながら、俺はこの世界に来た経緯を話始めた。

「最初に断っておくが、これから話すことは他言無用でたのむ。

俺としても、まだ全てを把握している訳じゃないんでな。

それと、質問なんかは最後に受けるから途中で話の腰を折らないでくれ。」

それから、俺は自分がことは別の世界から来たこと。

そして、元の世界では既に死んでいるので帰れないこと。

この世界に来たときには既にリアやナハトと契約していたことや、俺の持つレアスキル『神格』（自らの意思で様々な魔法を産み出せる）や『邪眼』（相手に一分間の悪夢を見せることが出来る）を使えること。

他にも、驚異的な自己再生能力『ディープ・ブラウン』（頭を潰されない限り、心臓を撃ち抜かれようが死にやしない）や常軌を逸した超感覚『ニュータイプ』（言わずもがなの“アノ”力です）等々。そして、俺の基本的な魔法型式がミッドと近代ベルカとのハイブリッドであること等を説明した。

「とまあ。はつきり言って俺もまだ状況を完全に把握している訳じゃないんで、説明できるのはここまでなんだけだな」

と、俺は一通りの説明を終えた。

（ま、アテナに誤って殺されてチート能力貰いましたっての言えな
いけどな）

そんな事を考えながら、全員を見回して見たら・・・。

固まってるじゃないです。

まあ、当然ですよ〜 俺だってこんなこと言われたら流石に反応
できないし。

龍斗 side out

フェイト side

正直、驚きです。

彼は私とそんなに歳も変わらないのに、異世界からこの世界に来た
だけでなく本当の自分の居た世界では既に死んでしまったなんて。

（それに、幾つものレアスキルを持つてるなんて・・・）
私は、彼がどんなに辛い人生を歩んできたか考えていた。

すると、彼が・・・。

フエイトside out

リンデイスide

「あゝ、それで頼みたいことがあるんですけど・・・良いですか？」

私が今の話を自分なりに整理していると、龍斗君が少し申し訳なさそうに話しかけてきた。

（あら、こつゆう仕草は年相応でチョット可愛いかも）

「何かしら？」

「あゝ・・・、俺の魔力や身体能力どのくらいなのか、俺自身が把握してないんで調べて貰っても構いませんか？」

「構わないわよ。」

「エイミィ、お願いできるかしら？」

「あ、はい。じゃあ龍斗くんだね？私に付いてきて」

「あ、はい」

と、エイミィは彼を連れて会議室後にした。
それを見て、私はクロノたちを見回して話しかけた。

リンディ side out

フェイト side

「チョット良いかしら？」

リンディさんが私たちを見て話しかけてきた。

「彼の話聴いて、皆の率直な意見を聞かせてもらえる？」

「僕は、まだ正直信じられない。異世界から転生して現れたなんて、常軌を逸している」

確かに、クロノの言ってることは正しい。でも私は、それとは別の考えを告げた。

「確かにお話の中みたいなことだけど、私は彼が嘘をついてると思えません」

「アタシも、フェイトの意見に賛成かな？」

突拍子もない話だけど、嘘ついてる感じはしなかったし。
それに、ちよつと可愛いし」

アルフ、可愛いは関係ないと思うよ。それに、私は格好と思うし／
／

「そうね。私としても、彼の話を全面的に信じようと思ってるわ。
そこで提案なんだけど、彼を家で引き取ろうと思うの。

それに、彼にはフェイトさんと同じように囑託魔導師の試験を受け
てもらおうと思ってるわ。

どおかしら？」

え？彼を引き取る？じゃ、じゃあ一緒に暮らす？

(／／／／／／／／)

「僕としてはあまり賛同出来ん」それ、凄く良いと思います！」「
い・・・いや、良いと思う」

私は、クロノの言葉を遮るように答えた。
だって、彼と一つ屋根の下・・・ポッ

「アタシはフェイトが良いなら、別に良いよ」

「じゃ、決まりね。

戻ってきたら、聞いてみましょう。彼がそれでも構わなければ、だ
けど」

と、そんな話をしているとエイミィさんと彼が戻ってきました。

あれ？何だかエイミィ、呆れてるみたいだけど、どうしたんだろ？

フエイトside out

龍斗side

一通り測定を終わらせて、会議室へと戻ってきた。
で、エイミィが測定結果を報告する。

「えーっと、正直私も自分の目を疑ったんだけど、彼の魔力量は測定不能（EX）。身体能力も高く、動体視力や聴覚、腕力や脚力も常人離れた数値です」

エイミィはそう言いながら、測定結果を全員に見せながら説明した。

（いや、全能力EXって言ったきはするけどまさか、ここまでバグキャラ化するとわな（笑））

てな事を考えてると、リンディさんから一緒に暮らさないかって誘われた。

囑託魔導師にならないかっておまけ付きで。

「え？良いんっすか？

俺としては助かるんですけど、でもフエイトとか居るから聞いてk
「私は構わないよ！！」・・・謹んでお受け致します」

てな訳で、俺はリンディさん達に拾われただけでなく囑託魔導師の試験まで受けることになった。

ついでに言えば、フェイトがずっと俺の側についてくるようになった。

何故？

（なゝ、リア？何でだと思っ？）

（・・・マスターは、もう少し乙女心を理解するべきだと思います）
て言われてもなゝ。

この日から、リンディさんが俺の保護者になった。
養子になる訳ではないので、好きに呼んでくれて言われたけど、まあ普通で良いか。

序でに、フェイトやクロノの練習相手もやる事になったけど・・・、正直、どおすっかなゝ（色々な意味で）。

この瞬間、ラバーズ第2号が誕生していたが、龍斗は知る由もなかった。

人、それを『ご都合主義』と言う（後書き）

どら 「すみませんでした!!」

龍斗 「本当にな。更新遅えし、原作介入にはまだだし。」

どら 「ごめん」

龍斗 「いや、俺に謝られても困るけどよ。」

リア 「そうですね。私なんて今回、出番が少なかったですし」

龍斗 「まあ、後で今後の方針について話し合うとして、

今回もこの作品を読んで下さった皆様に心より感謝を申し上げます」

どら 「今後も精進して参りますので、皆様からのご意見・ご感想をお待ちしております」

リア 「次回予告」

龍斗 「囑託魔導師に成るべく、試験を受ける俺」

リア 「順調に試験を消化していくのですが」

龍斗 「最後の最後でお決まりの展開か？」

龍斗 & amp・リア 「次回、『性能は、戦力の決定的な差になるんだよ』」

ナハト 「心して見よ」

龍斗&a m p・iria「オチ、取られた!!」

『性能は、戦力の決定的な差になるんだよ』（前書き）

今回は少し長めです。

では、囑託魔導師認定試験。

『性能は、戦力の決定的な差になるんだよ』

始まります

『性能は、戦力の決定的な差になるんだよ』

アースラで保護されて二日後。

俺は今、時空管理局本部にて嘱託魔導師としての試験を受けようとしていた。

「しかし、御大層な名前のわりには普通な場所だな。」

「マスターは、一体どのような場所を想像していたのですか？」

俺の肩にちょこんと乗ったリアが訪ねてきた。

因みに今は、リンディさんが受付をしてくれている。

俺の側には、ミニサイズのリアと何故か服の裾を掴んで付いてきたフェイトが居る。

へ？何でフェイトも一緒かって？

そいつは彼女に聞いてくれ。試験受けにいくんで転送してもらおうとしたら、一緒に行くってついてきたんだから。

フェイト曰く。

「龍斗は始めていく場所だから、私が色々と案内してあげる。」

らしいのだが、彼女はこっちについてから、ずっと俺の服の裾を掴んで斜め後ろにいる。

（これじゃ、案内も何も無い気がするんだけどな）

俺がそんな事を考えていると、リンディさんが受付が済んだと教えてくれた。

うしー！！いつちょ咬ましてきますかー！！

龍斗 side out

フェイト side

（うー、何でこんなことしちゃったんだろう／＼／＼）

私は、龍斗が試験を受けに行くと聞いて一緒に付いてきた。

因みに、リンディさんが龍斗を預かる事になって、私は龍斗を名前前で呼んでいる。

まさか、本当に歳が同じなんて思わなかった。私より落ち着いていて、少し言葉遣いは悪いけど・・・。

「じゃ、これから宜しくなフェイト」

そう言つて、眩しい笑顔で握手して来てくれた。

その笑顔を見たとき、私の胸が高鳴ったことは秘密です。

フエイトside out

龍斗side

で、何でも試験は筆記、儀式、実技の三つがあるらしい。
俺は、筆記を受ける前に神格を使い脳を「答えを知っている」状態にした。

簡単に言えばアカシックレコードにアクセスし、これから出される試験の答えを知ったのだ。

ころそこ、カンニングとか言わない。

で、試験会場に向かう途中にリンディさんが口を開いた。

「ごめんなさいね。急に試験を受けて貰うことになってしまった」

「いえ、別に構わないですよ。この世界の知識は一応、持ってますから（アニメの知識とアカシックレコードにアクセスしたからなんだけどね！！）」

「でも勉強もしないで、いきなり試験じゃ不安でしょ？」

「いえ、全然！！（キリッ！！）」

「す、凄い自信ね・・・」

「まあ、見ててくださいよ。リンディさんの顔を潰すようなことはしませんから」

俺はそう言つと、後ろに付いてきているフェイトへと振り返つた。

「フェイトもさ、心配しなくても大丈夫だからさ」

「うん、信じてる。頑張つてね」

少しはにかんで答えてくれたフェイト。

お持ち帰りしてえ〜!!

てなやり取りの後、俺は試験会場に入室していった。

龍斗 side out

フェイト side

私は今、リンディさんと一緒に別室から龍斗の試験を見ている。

ここには、リンディさんの親友のレティ・ロウランさんやエイミィも居る。

「リンディまさかあなたが、もう一人推薦したいって言ってきたときは何事かと思ったけど」

「ごめんなさいね、無理言っただけ準備してもらっちゃって」

「別に構わないわ。」

その子の件もあるし、貴方の目に間違いはないでしょ」

と、レティさんが私の方をチラリと見た。

（そっか、私の時も見てくれたんだ）

そんな事を思っていると、画面上に龍斗が写し出された。

筆記試験が終わって、儀式魔法の試験会場に移動したみたい。

「龍斗くん、聞こえる？」

エイミィが、龍斗に通信で話しかける。

「あゝ、大丈夫。聞こえてるよ」

「じゃあ、ボチボチ始めようか」

「あ、チヨイ待ってくれエイミィ。儀式魔法って、召喚魔法でも構わないのか？」

「へ？別に大丈夫だけど」

「了解。んじゃ、始めますか」

そう言っただけで、龍斗は呪文唱え始める。

その姿を見ながら、レティさんが近くのモニターを見ながらリンデイさんに話しかけていた。

「彼、凄いわね地球出身なのに筆記試験、満点よ。いつたい、どんな子なの？」

「そうね、少し訳ありではあるけど良い子よ？」

「答えになつて無いけど、まっ良いわ。」

それにしても、儀式で召喚を選ぶなんて」

私も、龍斗が召喚魔法を使えるなんて知らなかった。何を召喚するのかな？

フエイトside out

龍斗side

儀式魔法の試験で召喚がありつてのは、助かった。

俺は、三匹の空想上の生き物を思い浮かべて呼び出した。

「我が声を聞き、我が声に答えよ。」

汝、その猛々しくも雄々しき姿を我の前に示せ。

我が名は高峰 龍斗。

我、契約しもの。

汝が名は『ミラールツ』、『アカムトル』、『ラオシャンロン』！
！」

俺がそう叫ぶと、俺の周囲に展開していた三つの魔方陣からルーツ、アカム、ラオの三匹が現れた。

（貴様が我等を呼び寄せたのか？）

ルーツが三匹を代表するかのように、念話で話しかけてきた。てか、念話で話せるんだ。こいつは、楽で良いや。

（ああ。俺がこの世界で、お前達を作り出した。で、俺が喚んだときに力を貸して貰いたい）

（了解した。我等を呼び寄せしは貴様だ、協力しよう）

（サンキュ。アカムとラオも宜しくな）

と、俺が返すとアカムもラオも頷き賛同してくれた。それを確認した俺は、空に向かって確認を取ってみた。

「おい、エイミィ。

これで大丈夫か？他にも何かやった方が良いか？

・・・例えば俺の居る半径50km圏内を、別の次元に繋げるとか？」

「い、いや。大丈夫だよ。

それだけ出来れば十分だから。

じゃー、次の試験は一時間後に行うから、それまで休憩にしてご飯食べちゃって。会場も、そこでやるから」

「ん、了解。

て訳だ。お前達、サンキューな。」

（うむ。ではまた呼ぶが良いぞ、我が主よ）

そう言つて、ルーツ達は姿を消した。

にしても、エイミィの奴なんか焦つてたけど、何かあったのか？

龍斗 side out

フェイト side

正直、ビックリした。だって、龍斗が龍ドラゴンを召喚するなんて。しかも、同時に三匹も。

「凄い・・・」

龍斗、本当に凄すぎる。

制御の難しい龍の同時召喚なんて、しかもそれ以外にも何だか物騒な事も言つてたし。

「正直、驚いたわね彼にわ」

「え、ええ。私もこれ程とは思わなかったわ」

レティさんやリンディさんも驚いてる。

エイミィに至っては、まだ自分のほっぺたつねってるし。

（あんなに引っ張って、エイミィ痛くないのかな？）

でも、気持ちはわかる。

私もまだ、これが現実だなんて思えないし。

と、そんな事を思っていると、龍斗が私に通信で呼び掛けてきた。

「おい、フェイト。弁当一緒に食わないか？リアが今、取りに行
ってんだけどさ」

「え？あ、うん。

ちょっと待ってて。今、行くね」

「おう。じゃあ待ってつかんな」

そう言つと、通信が切れた。

うん。龍斗に色々聞いてみよう。

私は、龍斗の元へと急いだ。

フェイトside out

龍斗side

で、俺はリアとフェイトと一緒に弁当を食べている。

しかも、この弁当は俺の自信作。

え？何でお前が作ってんだって？

ふっふっふ。料理は俺の趣味！！和・洋・中にデザートとその腕は、現世でも絶賛されていたのだよ。

んで、今日は試験前にちゃちゃっと作っておいたのをリアにさっき、取りに行かせて今に至ると。

「龍斗、お料理上手なんだね」

「マスター、宜しければ今後、私にもご教授ください！！」

なんて、フェイトとリアにも好評なようで何よりだ。

「まあ、時間が合えば教えてやるよ」

「それにしても、マスター。さっきのは些か反則じみていたと思うのですが」

「ん？…あゝ、ルーツ達の事か？

まあ、やるんならアイツ等くらい出さないと張り合いねえし」

「ですが、『祖龍』に『覇龍』更には『老山龍』ですよ？これだけの古龍種を呼び出すのに使われる魔力量は、いや、俺ならそこは問題無いしな」・・・そうでしたね。マスターの魔力は無尽蔵なのを忘れていました」

てなやり取りをリアとしていると、フェイトが呆れたように俺達を見ていて。

「でも、龍斗。あんまり無理はダメだよ？
次の実技試験だって控えてるんだから」

「大丈夫だって、フェイトは心配性だな」

そう言つて、俺は笑顔でフェイトの頭を撫でてやった。
すると、みるみるうちにフェイトの顔が真っ赤になっていく。

「おい、フェイト。大丈夫か？
顔、赤いけど。風邪でも引いたか？」

「う、うん・・・だ、大丈夫だよ。／＼／」

「そうか？辛かったら言えよ？」

にしても、いきなりどうしたんだ？

そんなこんなで、昼食を終えた俺達は次の試験までダラダラと過ごした。

龍斗 side out

リア side

（マスターは、鈍感過ぎます。これでは、フェイトさんも苦勞する事でしょう）

私は、今のやり取りを見て、少し呆れてしまいました。

リア side out

フェイト side

（うゝ、龍斗反則だよ。あんな顔されて、頭を撫でられたら嬉しくてドキドキしちゃった／＼）

で、今は食事を終えて龍斗はお昼寝中。

本当は、膝枕とかしてあげたかったんだけど、恥ずかしくて言い出せなかった。

今はリアさんと二人で、龍斗の寝顔を見ている

「マスターも、寝ている時は年相応に見えて可愛らしいんですね」

「うん。・・・リアさんは龍斗の事、どう思いますか？」

「それは、主としてですか？それとも、一人の異性としての認識で

すか？」

「え?! あつ、えつと・・・その・・・」

「ふふ。冗談です。」

フェイトさん、アナタのお聞きになりたいことは理解しています」

うう。案外、リアさんはいろんな意味で手強そう。

美人でスタイルも良いし、それにどこか落ち着いているけど好奇心旺盛な目をしてる。

「私には勿体無い程の方です。実際に私が人間であれば、この方と生涯を共にしたい思っています」

「やっぱり・・・」

「ですが、私はこの方のユニゾンデバイス。

この方の子を授かる事が出来ません、ですから今後、マスターに好意を寄せている方がいるのであればその方を、全力で応援しようと考えています」

「・・・」

「ですから、頑張つて下さいね。フェイトさん」

「え? ええゝ／／／」

な、何で気付いたんですか? リアさん?!

「ふふふ。アナタのマスターを視るときの瞳を見ればわかります。」

・・・マスターは気が付いてはいないようですが」

「え、あのっ・・・?!」

「大丈夫です。この事は他言無用に致しますので」

うゝ。やっぱりリアさんには勝てない気がしてきた。

でも、私は彼女が応援してくれると言ってくれたことに少しの勇気を貰った気がした。

「ありがとうございます!!」

私、頑張ってみます!!」

「はい。頑張ってくださいね」

この時、私達の間に小さな友情が芽生えました。

フェイトside out

龍斗side

休憩時間も終わり、フェイトも別室で観戦するために移動した。俺は、ナハトを起動させて試験官が来るのを待っている。因みに、ナハトのモードは1st『斬艦刀』

「にしても、試験官って誰だろな？」

「やはり、殿も気になりますか？」

「いんや、あんまし。」

どうせ、直ぐに終わっちまうと思うし」

「へえ、そいつは大した自信だね」

と、俺の前に転移してきた優男。

見た目は・・・特徴無し。パツ金でやたら、髪をかきあげてるのが無性にムカつく。

「僕はジェリド・メサ。」

AAAランクの魔導師で、君の実戦訓練の試験官さ」

うわ、こいつ何かムカつくからフルボッコ決定
ん？待てよ・・・。

「あんた今、AAAランクって言ったか？」

「当然。君のような魔法レベルの低い世界から来た受験生には勿体無いくらいさ」

「へ。んじゃ、全力で行って良いのか？」

「フツ。君は口の聞き方を覚えるべきだね。
ま、低脳な君らしく思えるが」

うん。こいつ、全力で潰そ

「んじゃ、時間も勿体無いんで始めましょう」

「ああ、構わないよ」

俺はその言葉を聞くや否や、ガトリングポットを乱射しつつ上昇。相手が障壁を張ったのを確認して、更に背中中のレーザー砲からも収束型の砲撃も追加する。

時間にして、五分ほど砲撃の嵐を浴びせてやったところで一度手を休めた。

すると・・・。

「き、君は非常識にも程がある！！
いったい何処に、試合開始直後にこれだけの砲撃をしてくる魔導師がいる！！」

「ここに
それに、アンタでも十分に防げるように、B+位の威力で貫通効果も排除してやったんだから、感謝してくれよ？」

「君は一体、何様だ〜！！」

そう叫ぶとジェリド（笑）は、無数の誘導タイプの魔力弾を放ってきた。

俺はそれを瞬時にロックし全身のアーマーを開いた。

「マルチミサイル全弾発射！！」

それから激しい魔力弾vsマルチミサイルの応酬となった。
まあ、俺がミサイルだけで相手してやってるから良い勝負に見えるけど、実際にガトリングポットやナハト本体を使ったら一瞬で勝負が付く。

「ぐっ!!この僕が、エリートである僕が、こんな一般人に負ける筈がない!!」

おゝおゝ、頑張るね。

(ナハト、そろそろ決めるぞ)

(承知!!)

俺はミサイルの発射を止め、奴の攻撃を正面から受けた。

龍斗side out

All side

ドゴオオオオ!!

「フッ!!ふはははっ!!やはり貴様じゃ僕には勝てないのさ!!」

ジェリドは尚も執拗に攻撃を加えている。

彼はミッド式の魔法を主体としているため、砲撃系の魔法を数多く扱う。今も、誘導・直射・高速誘導・高速直射などの砲撃を加えている。

端から見れば、リンチ以外の何者でもない。

「ふはははは！！これで最後だ！！」

そう叫ぶと、彼のデバイス（杖状）の先端へと魔力が集束していき・
・・。

「消し飛べ！！」

『コズミック・バスター』！！」

ドッゴオオオオ！！

ジェリドの砲撃は、確実に龍斗を捉えた。

辺りには凄まじい衝撃波が発生し、木々を容赦無く揺らした。

誰の目から見ても、やりすぎなのは明らかだったが・・・。

「これで終わりか？」

爆炎の向こう側から、声が聞こえた。

そして晴れて行く煙。

そこには、何事も無かったかのように龍斗が浮いていた。

掠り傷一つ無く、彼は不敵に笑みを溢していた。

「今のが、アンタの最強だろ？威力はAってところか。
んじゃ、俺も一撃くれてやるよ。ちゃんと障壁張つとけよ」

そして、龍斗が構えた。

自分の身長の上三倍以上ある大剣を片手で振りかぶる。

そこには、何者逃れることの出来ないであろう殺気を放つ魔物がいた。

そして

「一律先進、狙いは一つ！！」

そう言つて、加速する。

「斬艦刀、一文字切りいいいい！！」
降り下ろされた刀身からは、凄まじいほどの魔力量の斬撃が放たれる。

ジェリドの張った障壁等、存在しなかったかの如くすり抜け。
地響きと共に辺り轟音が轟いた。

「我に断てぬもの無し」

その場に残ったのは、龍斗と哀れナハトの先端にぶら下がったジェリドだけであつた。

All side out

フェイトside

画面が真っ白になった。

それが晴れると、私はまた自分の目を疑った。

（今日は一日中、驚いてばかりいる気がしてきた）

龍斗が放った斬撃で、辺りの地形は変形して、巨大なクレーターが出来ていた。

「彼は本当に人間なの？」

レイティさんに関しては、こんな発言まで出るほど。

「え、ええ・・・多分」

リンディさんも自信無さそうに、答えている。

「あゝ・・・龍斗くん、試験官を医務室まで連れていってくれる？」

「了解。で、試験の結果は？
もし不合格なら、この施設消すけど」

え？ええ？！

龍斗、それは流石に不味いよー！！

私は、龍斗ならやりかねないと本当に思った。

「ふー。大丈夫よ。

貴方ほどの実力者を野放しに出来るほど、今の管理局には人材がそろっては居ないもの」

レティさんが、通信で龍斗に返す。

あ、ちょっと龍斗が驚いた。

「それに、さっきの反応だと直ぐに認定証も準備しろってところかしら？」

「あんだ、話が早くて助かるよ。
出来れば、今日明日中にで」

「わかったわ。貴方ほどの人材が手に入るのなら、お安いご用よ」

「ん。んじゃ、帰るか。

おーい、フェイト。リア。帰るぞ」

そう言って、龍斗は通信で私に呼び掛けてきた。
あれ？リアさんはユニゾンしてるんじゃ？

「はい、マスター」

と、私の後ろから出てきてリアさん（小）。
え？リアさん、ユニゾンしてなかったんですか？！

「これはまた、とんでもない子が現れたわね」

レティさん、頭押さえてる。

リンディさんもエイミィも苦笑いだし。

龍斗、恐ろしい子

この日、一つの伝説が生まれた。
それは『試験会場を半壊させた男』と言った。

『性能は、戦力の決定的な差になるんだよ』（後書き）

どら 「いや、今回は試験とリア＆フェイトの友情を描いてみたさ」

龍斗 「友情は良ししよう。
だけど、何だこの戦闘描写は!!」

どら 「ひぎい!!
ごめんなさ!!」

龍斗 「まったく、お前の才能の無さには、ほんと呆れるぞ」

リア 「全くです。私なんて、未だにユニゾン出来ないですし」

どら 「だってだって!!」

龍斗 「駄々捏ねるな!! キモイは、マジで!!」

どら 「ちっ!! ちょっと強いからって、いい気になりやがって」

リア 「アナタが、そのように書いたのでわ?」

龍斗 「あ、リア。相手にすんな。アホが移るぞ」

リア 「はい」

どら 「君たち、俺の事キライだろ?」

龍斗&リア 「「当然^{です}」」

どら 「うゝ。いいんだどうせ俺なんて・・・」

龍斗 「どれ、面倒なのが隅でいじけてる間に次回予告、終わらるか」

リア 「はい」

龍斗 「で、次回の話は？」

リア 「何でも、私達の設定紹介みたいです」

龍斗 「つまり、逃げたと」

リア 「みたいです。そろそろ、原作介入しても良いのですが」

龍斗 「まあ、こいつは何故かココでワンクッション置きたいみたいだからな」

リア 「ですね。でも、後でまた色々と辻褄が合わなくなるんですよ」

龍斗 「だろゝな」

龍斗&リア 「次回『キャラ設定は、自分の中でちゃんと組み立ててから書くのが常識だと思ったのに出来ないやつ』」

ナハト 「心して見よ」

龍斗&a m p・iria 「またか（ですか）？！」

『キャラ設定は、自分の中でちゃんと組み立ててから書くのが常識だと思ったの
今回は、設定紹介です。

一応、細かな詳細等を載せてみました。

では『キャラ設定は、自分の中でちゃんと組み立ててから書くのが
常識だと思ったのに出来ないやつ』

始まります

『キャラ設定は、自分の中でちゃんと組み立ててから書くのが常識だと思ったの

今回は、A s・原作介入直前スペシャル（仮）

あのチート主人公やデバイス達について、現段階で公表できる情報を載せたいと思います。

どら「因みに司会は、作者こと私『どら』と」

アテナ「プロローグ以降、出番がなかった神様（仮）『アテナ』です」

アテナ「てえ！！何でまだ（仮）が着いたままなのよ！！」

どら「いやゝ。その方が最初から読んでいただいてる、読者の皆様にはウケが良いかなゝって」

アテナ「アンタも殺っちゃうわよ」

どら「なら、私の権限で消えますか？」

アテナ「ごめんなさい！！」

どら「フツ。神様（仮）さえ、ココでは私には敵わない・・・あゝ、優越感」

アテナ（何で、こんなのが作者なのよ。

もっとまともな人間はいなかったわけ！！）

どら「ん？何か言っただ？」

アテナ「いえ、別に」

どら「さて、ここでいつまでもフリートークやってもしょうがないので、そろそろキャラ紹介に行きましょう。

まずは、この作品のMr・チート主人公の『高峰 龍斗』です」

名前：高峰たかみね 龍斗りゅうと

年齢：9歳（作品連載開始時）

身長：152cm

体重：43kg

魔導師ランク：EX（測定不能）

主要魔法形式：ミッドチルダ式を主体とした近代ベルカ式のハイブリッド式

デバイス：インテリジェントデバイス『ナハト』（後に詳細記載）

ユニゾンデバイス『リア』（後に詳細記載）

レアスキル
希少能力

『神格』：この力は、龍斗が想像（妄想？）した様々な魔法を生み出す力。

備考

これは、色々なアニメやマンガの能力をコピーする事もあれば、完全オリジナルのтонでも技を作り上げることも出来る。

『邪眼』：目を合わせた相手に、一分間の悪夢を見せる事が出来る。

備考

お気付きの方もいるかと思いますが、この力は『Get Backers』に出てくる能力です。

『ディープ・ブラウン』：常人離れた身体能力や自己再生能力を生み出す細菌です。この細菌を体内に宿す限り、頭を潰されない限り死ぬことはありません。

備考

これは、『Ever17』と言う作品に出てくる物を勝手に改良したものです。

『ニュータイプ』：人知を超えた超感覚。四次元的思考能力に長け、第六感としての勘の良さなど、人外感覚を持つ。

備考

この力は、馴染みの深い方は多いと思います。隕石をガンダムで止めたアノ方や、赤い方などが持つ特殊能力です。

詳細：外見はガンダムWのデュオ・マクスウェル。
本来、死ぬ予定はなかったのですがアテナ（神様（仮））の手違いにより死んでしまった、残念な主人公。

現世では吹奏楽部の副部長をしていたり、料理が趣味だったり、オタクだったりと何かと統一性の無い人間だった。

少々、口は悪いが他人を思いやる心もち、自分のテリトリーに入れた者は全力で守ると誓う熱い心も持っていたりいなかったり。

この作品では、リリなのAsの世界を救うべく扮装する予定です。
因みに、ハーレム効果は実はアテナが付加した物で、龍斗自信が望んだ体質ではない。なので、ハーレムルートに突入してもきつと気が付かないだろう。

デバイス非融合時に使用可能な能力（魔法や技）

魔法名：『ヒール』

威力：A A

備考

これは、テイルズシリーズでお馴染みの回復魔法です。

しかし、龍斗の常識外れの魔力を使用することで、その回復量は飛躍的に上がっています。

魔法名：『スターダスト・レイ』

威力：A A

備考

本作オリジナルの魔法です。
イメージとしては、フェイトのフォトンランサーを数倍に増やした物です。

技名：『ゴットフィンガー』

威力：S

備考

これは、Gガンダムに登場する『ゴットガンダム』の必殺技です。
龍斗の持つ、膨大な気を手に這わせる事により、灼熱とも言える熱を発して敵を粉碎します。
因みに、ガジェット程度であればこれだけでも本来は事足りるとか…。

魔法名：『奇跡の鐘』
きせきのかね

威力：????

備考

こちらも、本作オリジナルの魔法。
世界の理を外れた、奇跡を起こす。
しかし、いくら企画外の力を持つ龍斗と云えど、この力を使うと相当の付加が掛かり生命危機にすら直面する。

どら「こうやって見ると、本当にとんでもないキャラだな」

アテナ「だね。しかも、私の手違いで殺した事になってるけど、何かあるんでしょ？」

どら「んゝゝ、どうだろね？俺としても、色々と考えてるけどね」

アテナ「まあ、アンタの事だから、また変な事やらかすんでしょ？」

どら「当然！！まあ、話が進めば進むほどカオス化していくと思うぞ」

アテナ「うゝわゝ。ぶっちゃけたわね」

どら「……誉めるなよ」

アテナ「誉めてないわよ！！」

どら「あり？」

アテナ「そんな事より、紹介の続き行くわよ」

どら「おゝ！！」

続いては、Mr・チートの相棒『ナハト』だ」

名前：ナハト

種類：インテリジェントデバイス

備考

通常時はクロス型のピアスで、龍斗の左耳に着いている。龍斗とセツトアップした際は、マクロスFに登場するVF-25（アーマード装備）のような重装甲・高火力形態となる。

しかし、あくまでバリアジャケットとしての概念を尊重し、関節部のインナーの露出やフェイスガードの廃止など、少々アンバランスなビジュアルとなっている。

さらに、バルキリー特有の変形機構を排除（人の関節があんな変形に、耐えられるか疑問のため）。それにより、バトロイド形態のみ使用する形となる。

ここで、作者の独断と偏見でウイングゼロカスタムの翼を追加することにした。

この翼はシールドの役割もこなし、デイベインバスタークラスであれば防ぐことが可能である。

これは、本作品のタイトルにある『舞い降りし翼』に関連していることは明白である。

さらに、このバリアジャケットにはもう一つ秘密があり、任意でアーマードバックの排除が可能である。

それにより、超高起動戦闘を可能とする。

アーマードバックを排除した際の機動力は40%増となるため、本気を出せば追い付ける者は恐らく皆無であろう。

さらに、作中に登場するガトリングポットは支援AIを搭載していない、ただの魔力制御装置であることが判明。ナハトの本体は、別の形態を取るためにこのような処置が施された。

ナハトデバイスフォーム

1stフォーム：斬艦刀

技名：『斬艦刀・一文字切り』

威力：A A A +

備考

これは、スーパーロボット大戦に登場する『ダイゼンガー』の武器。身の丈三倍程の大剣で、この形態が最も使用魔力が低い。主に、対艦・対城など大型の目標を接近して破壊する事に特化している。技も、オリジナルをそのまま転用している。

2ndフォーム：ヒートショーター

技名：『鬼神乱舞』

威力：S

備考

これは、ガンダムWに登場する『ガンダムサンドロック』の武器。独特の形状をした双剣で、魔力放出時には刃が紅く染まるのが特徴。主に、高速戦闘時に使用されるが、本作中では未だその姿を見せていない。技に関しては、モンハンの鬼神化時の双剣乱舞をイメージしていたできれば、幸いです。

3rdフォーム：ツインバスターライフル

技名：『ツインバスター』

威力：SS〜????

備考

こちらも、ガンダムWに登場する『ウイングガンダムゼロカスタム』の武器。

二本のバスターライフルという、極めて強力な兵器。
魔力を圧縮して撃ち出す使用となっていて、魔王の持つスターライ
トブレイカーをも凌ぐ優れたもの。
しかし、チャージに相当の時間を要する為、連射性は低い。
技の発動イメージも、劇中のゼロカスタム同様と思っただけ
ばと。

4thフォーム：夜刀【月影】

技名：『はくらいがりゅう白雷牙龍』

威力：SSS〜???

備考

これは、モンハン2Gに登場する太刀『夜刀【月影】』その物です。
漆黒の刀身を持ち、野太刀を彷彿とさせる長刀です。
技に関してですが、これはシグナムの『紫電一閃』と同系統です。
しかし、刀身から放たれる斬撃は白く輝く雷の龍です。

因みに、これらのフォーム以外にも今後様々なバリエーションが登
場する予定です。

詳細

ナハト自体は、極めて冷静沈着がモットー。
龍斗を『殿』と呼ぶのも、他のデバイスとの差別化を図るべく採用
された。

少々、時代錯誤なしゃべり方をするのが特徴とも言える。

何をおいても、主を第一に考え一歩引いたところから事態を把握しようとする。と努めている。

その為、作中に空気になることもしばしば…。

どら「いやゝ、ナハトの説明長!!」

アテナ「確かにねゝ。アンタが考えた設定だけど、チートどころの話じゃないわね」

どら「確かに、そんな気がしてきた」

アテナ「それに、ナハトにはまだ進化の予定があるの?」

どら「ああ。今後の展開次第では、更にバリエーションが生まれる予定だ」

アテナ「・・・ホントに、色々とブレイクする気ね」

どら「・・・自分でも、かなゝり無茶してるって思えてきた」

アテナ「ま、気を取り直して最後のキャラ紹介しよ」

どら「そうだな。トリを勤めるのは、本作中で龍斗ラバーズの発起人にして、頼れる皆のお姉さん!!」

リア嬢だ!!」

名前：リア

種類：ユニゾンデバイス

アウトフレーム時の外見年齢：18歳

スリーサイズ：「ひ、秘密です／／／」

備考

龍斗とユニゾンした際は、主に防御面のサポートに徹する。
彼女自体の戦闘能力も高く、龍斗が使用する『スターダスト・レイ』
や『ヒール』、更には彼女オリジナルの『イージスの盾』と呼ばれる
防御壁を使用できる。

魔法名：『イージスの盾』

備考

これは、スーパーロボット大戦 外伝に登場したシールド。
時空震すら防ぐ代物で、本作中でもその設定をそのまま採用している。

詳細

龍斗のユニゾンデバイスであり、彼の最大の理解者である。

外見は一騎当千の『孫策 伯符』をイメージ。

落ち着いて、常に仲間達を気に掛けている。

龍斗を第一に考え、龍斗の為であれば何でもこなしてしまう正に最強の彼女（仮）。

しかし、自分がデバイスであるという理由から、龍斗を幸せに出来るのは自分ではなく人間なのだと思っている。

そんな彼女は、龍斗の前に次々と現れる女性達を応援する事を、今

の生き甲斐のように感じているらしい。」

アテナ「・・・ナハトと比べると、かなり短いわね」

どら「・・・ああ」

アテナ「て！！アンタはどここのゲンドウよ！！」

ゴスー！！

どら「いつてゝ！！」

アテナ「まったく。遊んでないで、リアちゃんの設定が短かった理由は？」

どら「いやゝ、龍斗が最強過ぎるだろ？お陰で、ユニゾンあんま意味無いなゝって」

アテナ「うわ、酷い！！アンタねゝ、リアちゃんが可哀想でしょ！！」

どら「いや、俺もそう思ったから、新しい立ち位置を作ったんだよ」

アテナ「それが、『皆の頼れる、お姉さん』？それにしては、インパクトが薄いんじゃない？」

どら「いやいや。これから本編に入ると、そこが映えるんだよ」

アテナ「例えば？」

どら「詳細は言えないけど、リインフォース助ける時や、助け出した後に大活躍！！」

アテナ「て事は、物語の後半に鍵になると？」

どら「ま、そんなとこだ」

アテナ「ふん。まあ、それなら私も大人しく観戦させて貰うわ」

どら「え？お前にも後で出てもらっよ？」

アテナ「はあ？！ちよつと、聞いてないわよ！！」

どら「だって言ってなかったし」

アテナ「こ、こいつー！！」

どら「まあ、楽しみに待ってなさい。かなり美味しい役回りあげるから」

アテナ「本当でしょうね。もし、出さなかったらただじゃおかないわよ」

どら「おう。そこは安心してくれ」

アテナ「わかったわ。で、そろそろ時間みたいよ」

どら「お？！本当だ。いや、長々としてたな」

アテナ「まったくよ。私なんて、久々の登場だったのに説明無しだし」

どら「だって、説明する事無いもん」

アテナ「はあゝ。まあアンタだし期待してないわよ」

どら「そんなに誉めるなよ／＼（テレテレ）」

アテナ「誉めてなゝい!!」

どら「マジで!!」

アテナ「そこで驚くアンタを尊敬するわ」

どら「では皆さん、長々とした設定紹介を読んでくださって、ありがとうございます」

アテナ「後書きで次回予告があるので、宜しければそちらもお読みください」

どら&アテナ「では、まったねゝ」

『キャラ設定は、自分の中でちゃんと組み立ててから書くのが常識だと思ったの

どら「いや、今回は私も登場出来て良かった」

龍斗「俺達は、そっちには出て無かったな」

どら「うん。だって、出てきたら色々と言句つけたろ？」

龍斗「当然だ！！そもそも、お前の独壇場つてのが気に食わん」

リア「そうですね。私の紹介なんて、マスターやナハトと比べて、すっっごく少なかったですし」

どら「いや、だって・・・ねえ？」

龍斗「俺に同意を求められても困るぞ」

どら「はっ」

リア「でも、アテナさんのお話の中で、私が後半の鍵になるって仰ってましたよね？」

どら「ん？そだよ。物語の後半で大活躍して貰う予定」

リア「なら、良しです」

龍斗「ちっ！！リアを懐柔しやがったか」

どら「そんな、人聞きの悪いこと言っなよ」

龍斗「ええい、鬱陶しい！！ナハト！！」

ナハト「セットアップ」

どら「え？！」

龍斗「3rdフォーム！！消え去れえ！！」

どら「ギャアアア！！」

龍斗「ふう。悪は滅びたか」

リア「あ、悪って・・・」

龍斗「良いんだよ、あんな奴」

リア「は、はあ」

龍斗「それでは、作者不在の為、この場を借りて俺達から、今回の話を読んでくださった全ての皆様へ」

龍斗& amp・リア「心よりの感謝を申し上げます」「」

龍斗「さて、次回予告やるか」

リア「はい」

龍斗「囑託魔導師としての初任務に赴く俺達」

リア「それは、彼がこの世界での初めての介入行動」

龍斗「俺が目指すのは、皆が笑って過ごせる未来」

龍斗& a m p・リア「次回『原作ブレイク警報発令!!』はじまりは突然になの」に介入せよ!!」

ナハト「心して見よ!!」

龍斗& a m p・リア「またかよ!!（ですか!!）」

『原作ブレイク警報発令!!』「はじまりは突然になの」に介入せよ!!」(前書

まさかの連投です(笑)。

今回は、アノ名言が聴けるかもしれません!!

では『原作ブレイク警報発令!!』「はじまりは突然になの」に介入
せよ!!」』

始まります

『原作ブレイク警報発令!!』『はじまりは突然になの』に介入せよ!!』

12月3日

俺は、アースラ御一行と共に海鳴市近郊（時空間内）へと来ていた。その理由は、第一級ロストログア通称『闇の書』の反応が最近、この付近で確認されたとの報告を受けたからである。

俺は、先の囑託魔導師認定試験に合格し、晴れて魔導師としてアースラに乗船している。

「それにしても、あのレティさんが俺を見逃したな」

俺は今、ブリッジでコンソールを操作しながら近くに居たエイミーに声を掛けた。

「まあ、本当は自分の管轄に入れたかったみたいだけど、艦長が『この子も、私が面倒を見るから』って言ったらしいよ」

「確かに、今の俺の身元保証人はリンディさんだけだよ。それで、良く折れたよな」

「んゝ。確か、フェイトちゃんも一緒をお願いしたって聞いたよ?」

「は?何でフェイトが?」

「一緒に居たかったんじゃないの?（ニヤニヤ）」

「?何でだ?別に、俺が居なくても、クロノやリンディさんにエイミーだっているだろ?」

「いや、そうじゃなくてね」

「？意味がわかんねえよ」

俺は、そんな会話をしつつも周囲に異常な魔力反応が無いかチェックしていた。

龍斗 side out

エイミィ side

駄目だ。基本的に勘が鋭いのに、こう言った事に関してはクロノ君以上に鈍感みたい。

（こりゃ、フェイトちゃんも苦労しそうね）

見ると、龍斗君の側で作業していたリア（アウトフレーム）も溜め息ついてるし。

そして、目があった私たちは、同時に苦笑してしまった。

（ホント、みんな苦労しそうね）

リンディ艦長や他のクルー達も、どこか温かな目で苦笑している事に龍斗君は気が付いて無かった。

エイミィ side out

龍斗 side

で、俺がやリアが何故アースラのブリッジコンソールを扱えるかと言っと。

「龍斗くんもリアさんも、情報処理能力がずば抜けて高いのよ。アースラに乗っている間だけでも良いから、手を貸して貰えないかしら？」

と、リンディさんに頼まれたので、俺達は二つ返事で了承したのだ。

（まあ、俺としても願ったりだけだな。これで、上層部やらがやってる事の尻尾を掴みやすくなる）

俺が目指すのは、皆が笑って過ごせる未来。

その為には、管理局の膿を出しきるのも俺の目標の一つでもある。俺は、仕事の合間を縫って情報を集めるよう、リアにも指示していた。

「マスターのご指示でしたら、私はその為に全力を尽くします」

そう言ってくれた時の、リアの表情がとても綺麗だと思ったのは内緒だ。

そんな事を考えていると、俺はのモニター上のある変化に気付く。

時刻は06:35。

場所は海鳴市 桜台。

確か、魔王が朝練してるんだっけか？

にしても、こんな朝早くから良くやるよ。

「あのさ、エイミィ。この魔力反応は？」

俺は知っているが、一応確認を取った。この段階では、俺は面識がないからな。

「ん？あ、その反応は『なのは』ちゃんね」

「なのは？」

「そ。高町なのはちゃん。

前の事件の時に、協力してくれた子よ。龍斗くんやフェイトちゃんと同じ年の可愛い子よ」

「ま、可愛いかは置いといて。この反応値の高さが気になるな」

「ん？何で？」

「今回の事件は、十中八九『闇の書』の完成が目的だと思うからな。これだけ高い魔力なら、目を付けられても不思議はない。彼女の周囲にも少し、警戒しておくべきか」

俺はそう言っ、コンソールを弾いた。

高町　なのはの情報が、俺の前のウィンドーに表示される。

（若干9歳にして、AAAランク魔導師。本当にとんでもないな）

俺は、そのデータをリアの所にも送った。

「一応、護衛対象として認識しておいてくれ。
狙われる可能性が、高いからな」

「はい。マスター」

リアも、俺の意見に賛同なのか直ぐに、そのデータを閲覧する。

「それにしても、本当に龍斗くんって凄いよね」

と、エイミイがこっちを見て、言い出した。

「ん？何がだ？」

「いや、こうやってお仕事手伝ってくれたり、フェイトちゃんの訓練に付き合ったり、3時のおやつにはお菓子作ってきてくれたり。本当に何でも出来るんだな」って

「別に、特別なことなんてしてないだろ？」

俺は、自分に出来ることをこなしてるだけだし」

「その、何でもないことを平然と出来るのが凄いんだって。しかも、まだ9歳だよ」

「あゝ・・・、言われてみれば、確かに」

（いや、実際は18+ だけだな）

俺はそんな事を考えながら、朝の勤務に勤めていた。

アースラー室

それから数時間後。

只今、絶賛ティータイム中。

本日のお菓子は、オーソドックスにクッキーとマカロン。

それぞれ、数種類作つてあるので飽きは来ないだろ。

因みに、ここは俺が宛がわれている部屋で、そこにはフェイトにアルフ、ユーノやクロノにエイミィとリンディさんにリアがいる。

それぞれ、思い思いに午後の一時を満喫している様子。

「それにしても、龍斗の作れるお菓子、美味しいね」

そう言つて、フェイトがクッキーをハムハムしている。やっべー、マジかわゆす！！

「本当ね。どれも、甘過ぎずそれと言って味気無くならず、絶妙の味加減」

リンディさんも、さっきから手が止まってない気がする。

「ですよ〜 私には到底無理だな〜」

エイミイも、幸せそうな顔して食べてるし。

「アタシとしては、もうちょっと甘くても良いと思うけどね」

アルフ、お前は食い過ぎだ。まあ、大量に焼いたから問題は無いけどな。

「それにしても、僕達までご馳走になってよかったのか？」

「ん？別に気にするな。俺が好きでやってることだしな。それよりユーノ、紅茶のお代わりいるか？」

「うん。頼むよ」

「ん。クロノは？」

さっきから、無言で書類を見ながらクッキーをかじってるクロノにも声をかける。

「ああ、頼むよ」

「おう」

俺はそう答えると、部屋に備え付けてある簡易キッチンへと向かった。

龍斗 side out

フエイト side

「ねえねえ、リア」

アルフがリアに話し掛けている。

「何でしょうか？」

「アンタのマスターって、何でも作れんの？」

「料理ですか？そうですね、恐らく作れないものは無い筈ですよ」

「えっ?! そうなの?」

あ、エイミィも参加した。

「はい。一度、マスターにレパトリーを聞いてみたのですが、その数が豊富で恐らく私達の知っている料理であるば何でも作れるみたいです」

「へー。あの歳で、魔導師やったり料理出来たり運動神経良かったり。本当に人間？」

「あ、アルフ!!」

まあ、アルフったら何て事を言い出すの!!

「ふふ。大丈夫ですよフェイトさん。マスターにとって、今の言葉は最高の誉め言葉ですから」

「「「「「え?」」」」」

クロノを除いた全員が、リアさんの言葉に反応した。

「マスターは、自分という存在を、どんな認識であれ認めて貰えれば、それが励みになると言っていました」

それって、どう言う事だろう?

私は、リアさんが言っていたことについて考えていた。でも、今の私にはその答えを知ることが出来なかった

フェイトside out

龍斗side

で、俺が紅茶を持ってくると、そこは何だか静かに思えた。

「?どうしたよ皆。何かあったのか?」

俺はクロノとユーノに新しい紅茶を渡し、席に着きながら聞いてみた。

「いえ、マスターは料理がお上手だと話していたんです」

リアが俺の問いに、即座に返してきた。

「?なら別に良いけどな」

俺はそう言っ、クッキーを摘まもうとして、ふと気付いた。

「フェイト、口元にジャムついてるぞ」

「え?」

俺は、そう言っ、フェイトの口元に着いたジャムを人差し指ですくい取り舐めた。クッキーに付けたジャムが着いたのか。

龍斗 side out

フェイト side

(はうゝ／／／)

私は顔から火が出そうな程に、赤くなつていくのを感じていた。だって、何の前触れもなく龍斗にあんな事されたら。

(／／／／／／／)

思い出しただけでも、恥ずかしいのと嬉しいので、頭がいつぱいいっぱいになった。

「りゅ龍斗！！君は何をしてるんだ！！」

クロノが龍斗に向かって、怒ってる(？)みたい。

エイミィやリンディさんは『きゃゝ』って言ってるし。

ユーノやアルフもポカンとしちゃってる。

リアさんは、私に向かってGJって親指立ててるし。

「ん？別に、何か問題あったか？」

龍斗は何で皆が騒いでるかわかってないみたい。

実は、天然なのかな？

でも、嬉しいから良いか

フエイトside out

リア s i d e

マスター、流石です。

こつちも自然に乙女心を驚掴みにするとは。

（マスター、恐ろしい子）

私は、改めてマスターが大物だと確信しました。

リア s i d e o u t

そんな午後の一時を満喫（？）したのち、俺はまたブリッジで周囲の確認を行っていた。時刻は19：45。

（そろそろ、ヴィータがなのはと接触する頃か）

と、突然アースラ内に警報が鳴り響いた。

俺はコンソールを操作しながら、状況の確認した。

海鳴市中心部に広域結界の展開を確認。ヴィータがなのはとの戦闘を開始したようだ。

「何があつた!!」

クロノがフェイトやアルフ、ユーノを連れて俺に訪ねてくる。

「海鳴市に広域結界の展開を確認した。その際に、高町　なのはだつたか？そいつが結界内に閉じ込められたのも確認している」

「なのはが?!」

フェイトが驚いているが、俺は構わず説明を続けた。

「恐らく、ここ最近のリンカーコアを狙った襲撃者の仕業だろう。俺はこれから、結界内に転移して彼女の救出に向かおうと思う」

「わかった、僕達も行こう。君一人でも構わないだろうが、彼女は僕達の友人だ。このまま放っておくことは出来ない」

クロノがそう言うと、ユーノとアルフも同意した。
そして……。

「なのはは、私が助ける」

フェイトはどこが決意にを込めた瞳で、俺を見上げていた。

「よし。リンディさん、構いませんよね」

既に、アースラのブリッジクルーは全員、配置についている。俺は

艦長席のリンディさんを見上げて、確認を取った。

「ええ。

もし、龍斗君の推測が正しければ、事態は急を要します。気を付けてね」

「はい。それと、転移装置までの移動時間が勿体ないので、ここから跳びます」

俺はそう言つと、ナハトをセットアップし神格を発動。フェイトやクロノもセットアップした。

「座標は海鳴市中心部。高町　なのはの魔力サーチ。サーチ完了。座標固定、魔力量増大、空間転移！」

俺が叫ぶと、周囲に現れた青色の光に包まれて、転移した。

龍斗 side out

なのは side

私は、突然現れた赤い女の子の襲撃を受けて、絶体絶命のピンチにひんしています。

既に、全身ボロボロで動くことも出来ない。目も霞んできた。

（こんなので終り？）

私は、ボロボロのレイジングハートを彼女に向けてる。

彼女は、大きなハンマー型のデバイスを、振り上げている。それが、降り下るされれば、多分わたしは・・・。

（嫌だ。ユーノくん、クロノくん、フェイトちゃん！！）

私は心の中で、そう叫び目をギュッと瞑った。

ガキン！！

何かがぶつかる音がして、私は目を開いた。

そこには、私の大親友と機械の天使を彷彿とさせる、少年が立っていた。

なのは side out

龍斗 side

ヴィータのグラーファイゼンをフェイトがバルディッシュで受け止める。俺は、フェイトの隣に立ちガトリングポットをヴィータに向けている。

「ごめん、なのは。遅くなった」

ユーノがなのはの隣に行き、肩に手を掛けている。
なのはは、何が起こったかわかっていない様子。

「ユーノくん・・・」

なのはが呟いた。

さて、俺はヴィータに視線を戻した。

ヴィータはフェイトに少し押され気味である。

「仲間か!?!」

ヴィータは少しイラついている様子で、そう言つと距離を取るため、
後方へと飛んだ。

フェイトはバルディッシュをザンバーフォームにして、一言。小さく、
しかし力強く言った。

「友達だ」

そう言つて、バルディッシュを構える。

ここに、『闇の書』を巡る戦いが幕を開けた。

『原作ブレイク警報発令!!』『はじまりは突然になの』に介入せよ!!』(後書

どら「ご免なさい!!」

龍斗「よし、言い訳は署で聴こうか？」

どら「だって、こう言ったネタ書きたかったんだもん」

龍斗「だもんじゃねえ!!」

リア「まあまあ、マスターも落ち着いて下さい」

龍斗「これが、落ち着けるか!!フェイトファンに刺し殺されるぞ!!」

どら「それも、面白そうだな」

リア「仕方ありませんよ。マスターは、『歩く天然フラグ製造機』でもあるんですから」

龍斗「リア、俺に怨みでもあるのか？」

リア「いえ、全然」

龍斗「おい、作者。リアが壊れかけてないか？」

どら「キノセイダヨ」

龍斗「何で片言?!」

リア「はい。おふざけはここまでです。読者の皆様へのご挨拶しますよ」

龍斗&p・どら（最初に話をややこしくしたのは、誰だよ！！）

リア「？何か言いましたか（ニコッ）」

龍斗&p・どら「いえ、何も！！」

どら「では、気を取り直して」

どら&龍斗&p・リア「今回もご愛読頂いた全ての読者の皆様に、心よりの感謝を申し上げます」「」

リア「もし宜しければ、皆様からのご意見・ご感想をどしどしお待ちしております」

龍斗「つきましては、誹謗・中傷に関しましてはお控え頂くようご理解の程、宜しくお願い致します」

どら「では、次回予告どうぞ」

龍斗「傷付いたのはとレイジングハート」

リア「私達は、この状況を打破するべく戦います」

どら「そして、新たに立つフラグ（笑）」

龍斗「・・・」

リア「様々な思いを乗せ、純白の翼は羽ばたく」

龍斗& amp ;リア「次回『戦いの嵐、ふたたびなの』って戦わなかったら、この作品成立しないたる？と思ったのは私だけ？』

ナハト「心して見よ！！」

龍斗「さあ、貴様の罪を数えろ」

どら「ギヤアアア！！」

『「戦いの嵐、ふたたびなの」って戦わなかったら、この作品成立しないだろう』

今回は、少し長いです。

本当は、前後編にしようかと思ったのですが、一気に書き上げってみました。

それでは『「戦いの嵐、ふたたびなの」って戦わなかったら、この作品成立しないだろう?」と思ったのは私だけ?』

始まります

『「戦いの嵐、ふたたびなの」って戦わなかったら、この作品成立しないだろうが、どおすっかね。」

（リア、お前はなのはに付いててやれ）

（はい。マスター）

俺の肩に乗っていたリアがアウトフレームとなり、なのはの傍らに降り立った。

「え？え？・・・あの？」

「大丈夫だよなのは。この人は味方だから」

リアに驚いているなのはに、ユーノが説明している。

（こっちは、任せて大丈夫そうだな）

さて、こっちも何とかするか。

「民間人への魔法攻撃。軽犯罪では済まない罪だ」

「ついでに言えば、この結界もちとやりすぎだな」

フェイトがヴィータを睨んで告げる。俺も、それに続いて口を開いた。

「何だテメエ、管理局の魔導師か？」

「時空管理局、囑託魔導師『フェイト・テストロッサ』」

「同じく、時空管理局、囑託魔導師『高峰 龍斗』だ」

俺達が、そう告げる。

俺は一步前に出て。

「抵抗すんなよ。お前じゃ、俺には勝てない。序でに言っならん」
抵抗しなければ、君には弁護の機会がある」・・・おい」

（俺のセリフ取るなよ！！）

フェイトが、俺のセリフを奪い続ける。

ヤベ、ありゃあ目がマジだ。

ま、それだけ大事ってことだ。なのはの事が。

「同意するなら、武装を解除して」

「誰がするかよ！！」

ヴィータはそう叫ぶと、外へと向かって飛んで行く。俺は、ナハト
（斬艦刀バージョン）を担ぎ直して言った。

「リアとユーノ、その子を頼むぞ。フェイト、行くぞ」

「うん」

俺達は、二人の返事を待たずにヴィータを追って外へと飛んだ。

龍斗 side out

なのは side

私は、フェイトちゃんと天使の男の子が飛んでいくと、ユーノくん
に回復魔法を頼んだ。でも……。

「僕より、彼女の方が早いよ。お願いできますか？」

「はい。では、失礼します……ヒール!!」

すると、私の体を白い光が包み込んだ。

光が晴れると私の傷は癒え、レイジングハートも元に戻っていた。

「すみません。私では、魔力の回復は出来ませんので、そちらはユーノさんをお願いしても宜しいですか？」

「解りました」

「あの、有難う御座います」

私は、リアさんにお礼を言った。

「いえ。ところで、なのはさん。先ほどの方に見覚えは御座いますか？」

「いえ・・・」

「そうですか・・・」

「でも、もう大丈夫。フェイトにアルフ、それに龍斗もいるし」

何でも、さっきの男の子（龍斗くん）が、この結界内に無理矢理転移してくれたお陰で、間に合ったってユーノくんが教えてくれた。リアさんは、彼に使える使い魔みたいなものだって、ユーノくんは言ってた。でも、リアさんは。

「私は、マスターのユニゾンデバイスです。詳しいご説明は、後ほど」

て言ってた。ユニゾンデバイスってなに？

「さて、ここに留まるのも危険でしょうから、一旦外に出ましょう」

ユーノくんがリアさんに提案した。リアさんも、同じことを考えていたみたいで、頷きながら私を支えてくれた。

（フェイトちゃん・・・）

なのはside out

龍斗side

俺達はヴィータに追いついた。と言うより、ヴィータが上空で待っていたと言った方が正しいか。

「フェイト、取り敢えず手え出すなよ」

「え？でも・・・」

「良いから。それと、あんまし俺から離れるな」

「う、うん／＼／」

俺はそう言つと、斬艦刀を振つた。
すると、刀身から放たれた斬撃がヴィータを襲う。

「グラーファイゼン！！」

ヴィータはそう叫ぶと、指の間に出現した四つの鉄球（？）を打ち出してきた。

そして直ぐ様、障壁を張る。

（なかなか、良い反応だ。・・・だけどな！！）

斬撃は障壁に阻まれ消滅。

俺も飛んできた、鉄球をガトリングポットで撃ち落とす。

（お？！ヴィータのやつ、ちょっと驚いている）

しかし、その隙に乗じてアルフがヴィータの下方から仕掛ける。

「ファイアー・ブレイク！！」

アルフは炎を纏った拳で、ヴィータの障壁をぶん殴った。

すると、障壁は破壊されたが、アルフも反動で大きく後ろへ後退した。

そんなアルフにヴィータが追い討ちをかける。

「コンのー！！」

ヴィータの一撃で、アルフが吹っ飛ぶが、障壁で防いだから外傷は見当たらない。

「うらっー！！」

俺は、ヴィータに斬りかかった。

しかし、ヴィータはそれを苦もなくかわす。

そんなヴィータに追い討ちを掛けるかの如く、フェイトとアルフがバインドをかけようとしている。

そこへ、俺が再度斬りかかる。

「おら、どうした？お前の実力はそんなもんか？」

「うるせー！！」

俺は、手を休めることなく斬りかかる。
しかも、あのバカデカイ斬艦刀を片手で。

「だったら、本気出すか・はあ！！投降するか・くっ！！しろ！！」

「うつせーよ！！・ぐっ！！・テメエこそ・うつ！！手え抜いて・はあ！！んじゃ、ねえよ！！」

あらら、ばれてたか。まあ、だからと言って本気出す訳にもいかな
いけどな。そうして、俺達は一進一退の攻防を繰り返していた。

龍斗 side out

ヴィータ side

アタシは正直、焦っていた。

せっかく見つけた大物だったのに、管理局の奴に邪魔された。

しかも、黄色い髪の方はわかんねーけど、いま目の前にいるこいつ
は、間違いなく強い。

天使みてえな羽生やして、バリアジャケットはシグナムのより重装
甲みてえだし。

おまけにスピードもある。

（カートリッジ残り二発。他の奴等ならまだしも、こいつ相手じゃゼツテ足んねえ）

今は、アイツが片手だから何とかなってっけど。両手で持って、本気出したらマジでやべーよ。

（実際、パワーも半端ねえし、こいつバケモノか?!）

ヴィータ side out

なのは side

私達は、フェイトちゃんの戦いが見えるビルの上に来ていた。そこから私は、彼の戦いを見ている。

「凄い・・・」

あれだけ大きなデバイスを、片手で振るっている彼の姿に目を奪われた。

多分、一撃一撃がフェイトちゃんやあの赤い子よりも重いのは、端から見ててもわかる。

だって、あんなに凄い攻撃をしてきたあの子が押されてるから。

「リアさん。龍斗のやつ、本気でやっていますか？」

「いえ、現在のマスターはフェイトさんの相手をしている時と、ほぼ変わらない程度の力しか出していません」

「で、ですよね・・・」

ユーノくんとリアさんが、そんな話を話していた。
え？あれで、本気じゃないの？
じゃあ、彼の本気って一体・・・。

なのはside out

龍斗side

「はぁー!!」

俺が、大きく横薙ぎに払った際、ヴィータは避けきれずグラーファ
イゼンでそれを受けた。

そして、衝撃を流すために後方へと後退したが。

「なっ?!」

アルフのバインドにより、その動きを封じられた。おゝおゝ、暴れてるよ。

俺はナハトを肩で担いで、フェイト達の前に立った。

そして、フェイトがバルディッシュをヴィータに向けて言う。

「終わりだね。名前と出身世界、目的を教えて貰うよ」

フェイトはヴィータの目を見て、そう告げた。

ヴィータは、そんなフェイトを睨んでいる。

いや、フェイトと俺を睨んでいるの方が正しいか。

（ま、何にせよこれで・・・?!この気配!!）

俺は、その気配に気付き叫んだ。

「フェイト、アルフ気を付けろ!!」

と次の瞬間、フェイトが何者かに斬りかかれた。

ありゃ、シグナムか。って事は、ザフィーラも一緒のはず。

ちよいと、面倒だな。

「フェイト、アルフ下がってろ。今のお前達じゃ、こいつ等には敵わない」

俺はそう言つと、広域探索をかけた。ターゲットはシャル。

ま、俺の探知が気付かれることはまず無いけどな。

「え?でも、龍斗・・・」

「安心しろ、こいつ等の相手は俺がする。お前達は、リアの所にいてくれ。リアの障壁は俺ですら、破るのに苦労するからな」

「アンタ、まさか・・・」

「ああ、少しばかり本気を出す」

「大丈夫なの？」

フェイトが心配そうに、俺の翼に触れる。

「安心しろ。俺は間違いなく、強ええ」

「うん、でも・・・」

「それによ、お前の可愛い顔に傷つけるわけにもいかないだろ」

俺はそう言つと、フェイトの頭を優しく撫でてやった。

「はう／＼／＼／＼」

すると、フェイトは顔を真っ赤にして俯く。

熱でも出たか？

俺は、フェイトの頭を撫でつつ、アルフにも言った。

「アルフも、無茶させられないしな。綺麗な肌してんだから、傷でも残ったら大変だ」

俺はそう言つて、アルフに笑いかけた。

すると、アルフも顔を赤くして、そっぽを向く。

「そ、そこまで言ってくれるんなら、しよっしょうがないか／＼／」

二人とも、どうしたんだ？

「ま、だからさ。待っててくれよ」

俺がそう言つと、二人は納得したようで、その場を離れた。

俺は、シグナム達に殺気を放ちながらリアに念話で話し掛けた。

（リア、イージスの盾を張っておけ。

こいつ等、蹴散らす序でに、この障壁も粉碎する）

（了解致しました、マスター。お氣をつけて）

（ふっ。誰に言つてんだ。俺が負けるはずがねえだろ？）

（うふ。そうでしたね）

（皆を頼むぞ）

（はい）

俺は、リアにそう伝えたと殺気を少々緩めた。
すると、シグナムが声を掛けてきた。

「貴様、名は？」

「人に訪ねるのなら、まず先にテメエが名乗れ」

「そうだな、すまなかった。私は、ヴォルケンリッターの将『シグナム』。そして、我が剣『レヴァンティン』」

そう言って構えるシグナム。

「俺は、時空管理局嘱託魔導師『高峰 龍斗』だ。
こいつは相棒の『ナハト』」

俺は、ナハトを3rdフォーム「ツインバスターライフル」にして
答えた。

「高峰、貴様はベルカの者か？」

「いや、ただ魔法はミッドとベルカの混合型だな」

「そうか。貴様、我等を相手に一人で勝てると思っているのか？」

「と〜ぜん。むしろ、物足りねえかもな。お前等『四人』じゃ」

「『『なっ?!』『』『』」

「あの、離れた場所に居るのは後方支援か？ま、俺にとっては大した距離じゃないがな」

俺はそう言つと、シャルの居る方角に顔を向けた。

シャルもそれに気付いたようで、驚いているのがわかった。

「貴様はいつたい、何者だ」

シグナムはカートリッジをリロードして、レヴァンティンを俺に向ける。

後ろでは、いつの間にか帽子を被ったヴィータもグラーフアイゼンにカートリッジロードしてるし。ザフィーラも人化して構えている。

「俺か？ただの魔導師さ。ただ、少しばかり規格外だけだな！！」

俺はそう叫ぶと、アーマーをフルオープンにした。

その瞬間、三人が襲い掛かってくる。だが・・・。

「遅えよ！！ファイアー！！」

俺の全身から、無数のミサイル解き放たれる。

シグナム、ヴィータは急停止・急上昇してかわそうとする。

ザフィーラに至っては、急停止後に障壁を張り凌ごうとしている。

そして、約1/4はシャマルへと向かって飛んでいった。

しかし、これは俺の魔力で無尽蔵に作り出されるミサイル。

攻撃の手が休まることはない。

更に付け加えるなら、追尾型だ。逃げられる筈がない。

「くっ！！なんという攻撃だ！！」

近場にいた、ザフィーラが叫ぶ。ご愁傷様。

俺はスラスター駆使し、縦横無尽に飛び回りながら、ミサイルの嵐を巻き起こした。

「これで、シャマルも防御に徹するしかねえよな」

俺は、なのは達を見た。

全員が啞然としている。それもその筈、俺はこうしている間にも、毎秒30発ものミサイルを放っている。

これは、フェイトとの戦闘訓練でも出したことが無いし、俺個人の訓練でも、これ程の数を産み出したことは無い。

龍斗 side out

なのは side

フェイトちゃんとアルフさんが、戻ってきた。
何でも、さっき襲ってきた人達を彼が一人で相手をするって言っ
たみたい。

「本当に、大丈夫なのフェイトちゃん」

「うん。龍斗は強いから」

そう言ったフェイトちゃんの目には、彼の強さを確信してるみたい
な力強さがあつた。

「それにしてもリア。アンタのこの障壁、とんでもないね」

アルフさんが、リアさんの張った障壁を見て言った。

「そうですね。私も、この魔法はマスターから頂いたのですが、何
でも時空震すら耐えうるらしいですよ」

リアさんが、少し嬉しそうに答える。
で、時空震にも耐えちゃう障壁って、凄すぎ。

「こんなときでも、龍斗の凄さを思い知らされるなんてね」

ユーノくんも、少し呆れてるみたい。

あれ？フェイトちゃん、どうしたんだろ？

「フェイトちゃん、お顔が赤いけど、どうしたの？」

「え？！な、何でもないよなのは！！」

急に動揺したみたいに、声が裏返っちゃった。
なんで？

「フェイト、さっき龍斗に言われたこと思い出してたでしょ」

アルフさんが、フェイトちゃんのほっぺたを、つつきながら笑ってる。

あれ？アルフさんのお顔も少し赤い気が・・・

「ア、アルフ！！私は別に、可愛いとかそんな・・・（ゴニョゴニョ）／／／」

あ、フェイトちゃんがまた真っ赤になっちゃった。

可愛いって、何の事だろ？

あれ？リアさんが苦笑してるし、ユーノくんも何だか呆れてるみたい。

皆、どうしたんだろ？

「取り敢えず、なのは。龍斗には気を付けた方が良いよ」

「う、うん」

ユーノくんが、ちょっと真剣な顔でそう言った。
でも、何で？

なのは side out

龍斗 side

「さて、そろそろ決めるか」

俺はそう言っと、アーマーを閉じツインバスターライフルを空に向けて構えた。

（ま、この数のミサイルだシグナムとヴィータもまだ追われてるし、シャマルとザフィーラは爆煙で周囲の確認が出来てないか）

俺は、それを確認するとチャージを開始した。

俺の周囲には、複雑に絡み合った魔方阵。

そして、舞い散る無数の白い羽。

周囲には突風が吹き荒れ。

膨大な魔力が、砲身に集中した。

「殿。これ以上は、時空震を引き起こす恐れが有るゆえ、此方で集束に制御を掛けても宜しいか？」

「ああ。てか、この威力なら余裕でぶち抜けるよな？」

「御意」

「うし！！ならいくぜ！！」

「「排除、開始！！」」

ドゴゴゴゴゴ！！

俺がトリガーを引くと、巨大な砲撃が天を切り裂いた。そして、凄まじい衝撃波を放ち、周囲に展開していた結界を『消滅』させた。その威力は凄まじく、アースラの観測機材が一時ストップしたり計測機器が測定不能を示したりと、艦内は一時騒然としたらしい。そのせいも有って、ヴォルケンリッター達の追跡が出来なかったと後でしこたまエイミィに怒られた。それと、魔力の消耗が著しかったのはとレイジングハートを本局へ連れて行く事になった。俺はその間に、今回の件の報告書の作成。フェイトはなのはに着いている。取り敢えず、今回は何とかなったか？

しかし、散り散りに逃げ行くヴォルケンリッター達の映像の中、ク

ロノはそれを目にした。

第一級ロストロギア通称『闇の書』を手に、飛び去るシャルルの姿を。

『「戦いの嵐、ふたたびなの」って戦わなかったら、この作品成立しないだろう」

どら「いや、今回は長かった」

龍斗「・・・おい」

どら「ん？」

龍斗「何か言うことがあるだろ？」

どら「お、確かに!!」

龍斗「死ね」

龍斗「何でそうなる!!」

どら「だって、今回の話で確実にフェイトファンの皆様を敵に回しただろ？ついでに、アルフファンも」

龍斗「お前がそう書いたんだろ!!」

どら「てへ」

龍斗「ナハト!!」

ナハト「セットアップ」

どら「あり？」

龍斗「フルオープン・ファイアー!!」

どら「ギャアアア!!」

リア「やり過ぎですよ、マスター」

龍斗「どうせこの程度じゃ、くたはらねえよ」

どら「確かにね」

龍斗& a m p・リア「復活、早（過ぎです）!!」

どら「いや、いつまでも殺られっぱなしは悔しいじゃん」

龍斗「いま、初めてのテーマがすげえって思えたぞ」

どら「そんなに誉めるなよ／＼」

リア「あまり、誉めてないと思いますよ」

どら「マジで!!」

龍斗& a m p・リア「はあ」

どら「そう言えば、今回は本編からゲストが来てたんだ」

龍斗「おい、んな話し聞いてねえぞ」

どら「うん 言ってなかったもん」

リア「・・・もしかして、先程から彼方の隅にいらっしやる方です

か？」

どら「そだよ。それではご紹介します、本編よりお越しのフェイトちゃんです」

フェイト「ど、どうも」

どら「やっぱり可愛いー！！おー持ち帰りいー！！」

龍斗「すんなボケー！！」

ブスッ！！

どら「ギヤアアア！！刺さってる、刺さってるー！！」

リア「マスター、流石にナハト1stフォームは大きすぎるかと」

龍斗「別にこいつだから、構わないだろ」

フェイト「ね、ねえ龍斗。作者さん、大丈夫なの？」

龍斗「問題ない」

どら「その通りー！！」

フェイト「きゃー！！」

龍斗「な、言った通りだろ？」

フェイト「う、うん・・・」

龍斗「んじゃ、時間も無いし、いつもの行くぞ」

全員『今回も、本作品を“ご愛読頂いた全ての皆様へ、心よりの感謝を申し上げます”』

龍斗& a m p・フェイト「「つきましては、皆様からの“ご意見・ご感想等をお待ちしております”」」

どら& a m p・リア「「尚、誹謗・中傷に関しましては、お控え頂くようご理解の程、宜しくお願い致します”」」

龍斗「それでは、次回予告『海鳴市に帰ってきて、色々とフラグが立つ予感がしてるんだよ』」

全員『心して見よ!!』

ナハト「取られた」

『海鳴市に帰ってきて、色々とフラグが立つ予感がしてるんだよ』（前書き）

更新遅れて、申し訳ありませんでした。

次回はもう少し早く、投稿したいと思います。

それと、先日シグナムとヴィータのデバイス名についてご指摘を頂き、訂正致しました。そのついでと申しますか、プロローグから現在投稿した分の話に少々手を加えましたので、そちらもご愛読頂ければ幸いです。

では、長々とした前書きでになってしまいましたが、本編。

『海鳴市に帰ってきて、色々とフラグが立つ予感がしてるんだよ』

始まります

『海鳴市に帰ってきて、色々とフラグが立つ予感がしてるんだよ』

ヴォルケンリッターとの一戦を終えた俺達は、時空管理局本局へとやって来た。

なのはは、先の戦闘で消耗した魔力の回復のため医療室にいる。フェイトも、なのはの見舞いに向かった。

んで、俺はと言うと。

「マスター。いつ、その様なものを作ったのですか？」

「ん？報告書を書いてた時だけど？」

「殿は、隠密行動にも長けているやもしれんな」

「それで、あれだけの量の報告書をものの数十分で片付けるんですよ」

リアに呆れられ、ナハトに感心されていた。

え？何をしたかって？

そいつは、まだ秘密だ。

「しかし、なのはのリンカーコアの採取を阻止できたのは良いが、やっぱ、レイジングハートとバルディッシュのダメージは深刻か」

そう、先の戦闘でレイジングハートは中破、バルディッシュも外装にヒビが入っていた。

「はい。今はユーノさんとアルフさんが、お二人の診察を行ってい

るそうです」

リアは、そう言うとき少し俯き加減に顔を伏せる。

リアは各デバイス達とも仲が良い。ナハトは当然だが、AI搭載型のデバイス達とはよく、自分達の性能や主の^{マスター}の実力、果ては自分達や主の成長のための課題についても話し合っていると。

そんな友人達（？）の傷付いた姿を見るのは、彼女にとって耐えがたいものだったかもしれない。

「ま、バルディッシュはそこまでじゃないが、レイジングハートは悔しいだろな」

「はい。『マスターを守れなかった、私にもっと力があれば・・・』と。バルディッシュさんも、それを聞いて『あの時、龍斗さん（マスター）が前に出てくれなければ、私もレイジングハートと同じ運命だったでしょう』と」

「まあ、そうなるのがわかってたから、俺が戦ったんだけどな」

「殿は、何故そこまでして、戦おうと？」

「ん？まあ、アテナに殺されて『この世界』に来た以上は、俺に出来る何かをしたいって思ってた」

「マスター・・・」

「それにさ、アイツ等には失って欲しくないんだよ。俺と『同じ思いをさせたくない』。ま、結局は自己満足に過ぎないけどな・・・」

「殿？」

「マスター？」

「いや、何でもねえ。今は忘れてくれ」

「いや、しかし殿・・・」

「良いから、この話しは終りだ」

ちつ。俺としたことが、口が滑ったな。幾らコイツ等でもまだ、これを話すのは早すぎる。

（俺としたことが、ミスったな）

「ほら、なのはの見舞いに行くんだろ？急ぐぞ」

まだ、何か言いたそうなリアとナハトを急かして医務室へと向かった。

龍斗 side out

リア side

先程見せた、マスターの憂いを帯びた表情。

実は、私達はマスターの事をまだ何も知らないのでは無いだろうか。

（それでも、私はこの方を守り抜いてみせる）

私は、新たな決意を胸に秘めたのです。

リア s i d e o u t

なのは s i d e

私は、目を覚ました。

「知らない天井だ」

何故か、そう言わないといけない気がして、私は呟いた。

でも、本当にここは何処だろ？私は、何となく辺りを見回してみた。

プシュー。

扉が開いて、フェイトちゃんが入ってきた。
でも、少し表情が暗い。

「フェイトちゃん・・・」

「なのは・・・」

「あの、ごめんね。せつかくの再会がこんなで。怪我とかしなかった？」

私は、苦笑い(?)をしながら聞いてみた。

「うん。私は全然。でも、なのはが」

フェイトちゃんの表情は、やっぱり、まだ暗い。私は、フェイトちゃんを元気付けたくて笑顔で。

「私は平気、フェイトちゃん達のお陰だよ。元気元気。うふふふ・・・あ、フェイトちゃん」

フェイトちゃんは今にも泣きそうな顔になっていた。私は、そんなフェイトちゃんの所に行こうとして。

なのは side out

フェイト side

「フエイトちゃん・・・あ?！」

見ると、ベットから立ち上がったなのはが、倒れそうになった。

「なのは!！」

私は、なのはが倒れる前に抱き止めた。

「あはは、ごめんね。まだちょっと、フラフラ」

なのはは、そう言つと少し力無く笑つて、私を見た。

「うん」

私も、小さく返事を返すしか出来なかった。
でも、なのはは笑顔を作つて、こつ言つてきた。

「助けてくれて、ありがとう。フエイトちゃん。
それから、また会えて凄く嬉しいよ」

「うん。私も、なのはに会えて嬉しい」

そつ言つて、私達は互いに抱き合つた。

フエイト side out

龍斗side

で、俺達は今、フェイトとなのはがハグしてる現場を目撃していた。と言っても、別に部屋の扉が開いてた、とかのオチでは無く。部屋に入ったら、そうだったってオチだ。

(いや、この場合どっちも変わらないか)

で、現在進行形でなのはと目がバツチり合ってたりもする。

「あゝ・・・ごゆっくり・・・」

「て、ええゝ!!」

俺は、そのまま回れ右をしようとしたら、なのはが叫んだ。その声につられて、フェイトもこちらを向く。

あゝ、フェイトもバツチり目え見開いてるよ。

「りゅ龍斗?! え? 何で?!」

「ああゝ、いや・・・そいつの見舞いに来たんだけど、忙しいみたいだから出直す」

「え? 忙しいって・・・ちっ違うよ?! 龍斗、何か勘違いしてる!」

「いや、勘違いも何もないだろ？それにしても、フェイトがソツチの子だったとは」

「ソツチって何？！・・・だから龍斗、待ってって！！」

「あゝ。わあったから、病室で騒ぐな。てか、テンパリ過ぎだ」

「はう・・・」

俺達が、そんな漫才（？）をしている間、なのははポカンと口を開けていた。

まあ、普段のフェイトからすると、有り得ない慌てようだったからな。

で、俺は再度なのはに向かい合った。

「よお、悪かったな。直ぐに駆け付けられなくて。お前やお前のデバイスに相当、無理させちまって、すまないと思ってる」

俺はそう言つと、なのはの頭を優しく撫でていた。

「え？！／／／」

なのはが、驚いて顔を真っ赤にした。

え？何で撫でてるんだって？何となくだ！！

まあ、身長差が頭一つ分位あるから、頭を下げるより、こっちの方が絵図等的に映えるかと思つてな。

俺は手を引っ込めると、改めて自己紹介をした。

「取り敢えず、初めましてだな。俺は『高峰 龍斗』フェイトと一緒にアースラに乗ってる、囑託魔導師だ。で、こっちのピアスがインテリジェントデバイスの『ナハト』で」

「宜しく頼む」

「で、こっちのちっこいのがユニゾンデバイスの『リア』だ。で、ここの挨拶はすんでたか」

「はい、マスター。ですが、改めて宜しくお願いしますね、なのはさん」

「あ、えつと・・・『高町 なのは』です。さっきは、助けてくれて、有り難う御座いました」

いきなり、敬語で返された。はて？この状況は、俺が年上だと勘違いされてるパターンか？

「じゃあ、なのは。一つ言っておくぞ。俺も9歳だ。敬語なんか使うな」

「え？ええゝ？！」

本日の二度目の絶叫。案外、五月蠅いのか？
故に、将来は魔王か・・・。

龍斗 side out

なのはside

今日は、あの赤い子の襲撃から驚きの連続です。

まず、凄くカッコイイ男の子とフェイトちゃん達が助けに来てくれて、その男の子が沢山のミサイルを撃つたり、凄く・・・大きい・・・でs、じゃなくて、とっても大きな剣や鉄砲ライフルを使って戦ったり、フェイトちゃんが、お顔を真つ赤にして物凄く慌てたり、その男の子が歳が私達と一緒にだったり。

「あ、えつと・・・りゅ、龍斗くん？」

同年年で、敬語はおかしいから、私はくん付けで龍斗くんの名前を呼んでみた。

「お、そっちの方が、しつくり来るな。
なのは」

へう。そう言って、私の名前を呼んでくれた、龍斗くんは眩しい程の笑顔だった。でも、名前を呼ぶのも呼ばれるのも、凄おしく恥ずかしいの。

でも、何でだろう？龍斗くんに名前を呼ばただけで、胸の辺りが急にぼかしてきた。

（フェイトちゃんの、お顔が真つ赤だったのも、これのせいだったのかな？）

だとしたら、わかる気がする。だって、色々と反則だもん。

なのはside out

龍斗side

さて、自己紹介も済んだし、そろそろ『アレ』渡すか。

「んでよ、なのは。お前、甘いもん好きか？」

「へ？好きだけど、どうして？」

問い返してきたなのはに、俺は持ってきた紙袋（小）をなのはに渡した。

因みに、中にはもう一つラッピングされた袋が入っている。

「まあ、お前自身の怪我也傷が残らなかったし、魔力も回復して来てる。

それと、助けに行くのが遅れた詫びだ」

「えっと・・・開けても良いのかな？」

なのははまだ、訳が解らない様子で、頻りにフェイトに視線を向けている。

「大丈夫だよ、なのは」

フエイトが、笑顔でそう言うと、なのはは袋をガサゴソし出した。それで、中の袋を取り出して目を輝かせた。

「うわゝ クッキーだゝ」

「時間が無かったんで、大したものは作れなかったけど、それで許してくれ」

「作るって、これ龍斗くんが作ったの？」

「ん？そうだぞ。口に合わなかったら捨ててくれても構わねえぞ」

「そ、そんな事しないよ！！だって、龍斗くんが・・・（ゴニョゴニョ）／／／」

何だか、ゴニョゴニョしてるが、まあ良いか。

「まあ、これから宜しくな」

俺はそう言つと、なのはに手を差し伸べてきた。

「うん 宜しくね龍斗くん」

そう言つて握り返された手は、少女らしいとても小さな手だった。

（やべ。魔王も実はちょっと可愛いかな？）

俺は、そんな事を考えていた。

龍斗 side out

フェイト side

「まあ、これから宜しくな」

「うん 宜しくね龍斗くん」

そう言って握手した龍斗を見て、私は少しモヤモヤしていた。

（龍斗、私にももっと優しくしてくれても良いのに）

そう思っていると、不意にリアさんが私の耳元まで飛んできた。

「フェイトさん。これから、大変そうですね？」

「え?! うっ・・・はい。でも、龍斗だから・・・」

「恐らく、気が付かないでしょうね・・・」

「ですよ・・・」

私達は、どちらともなく小さな溜め息をついた。

龍斗、鈍感すぎるのは罪なんだよ。

フェイトside out

龍斗side

なのはの見舞いの後、俺は別行動を取っていた。

クロノがなのはとフェイトを連れてどこかに行った。多分、デバイスの様子を見に行って、その後にグラムに会ったろう。

俺は、グラムに会ったら、その場でぶち殺しかねないので、クロノの誘いを『丁重にお断り』した。（後にリアは語る「アレは『脅し』と言います」と）。

んで、俺は今後の予定をリンディさんに聞きに、ラウンジに来ていた。

「で、『闇の書』の搜索にアースラが任命されたと？」

「ええ。でも、アースラは修理で本局ドック待機なの」

「となると、闇の書が関わったとおぼしき事件の中心世界『地球』に架設本部を設営して、そこを中心に搜索するのが上策か」

何て会話をしていたりする。

え？何でこんなに話がスムーズに進むかって？そんなの、ご都合主義だからに決まってるじゃん

「ええ。そこで、私達アースラスタッフとフェイトさんやアルフさ

ん、それにユーノくんにも同行してもらおうと思ってるわ」

「ふん。じゃあ、俺もそれに着いて行く感じ？」

「お願い出来るかしら？」

まあ、保護者のリンディさんに頼まれて、断るほど俺もスレて無いので構わないが・・・。

「構わないけど、一つだけ条件出して良い？」

「ええ。無茶な事じゃなければ」

「ん。多分、大丈夫。あつちに行ってから俺も独自に調べるから、その事に干渉しないでくれれば良いよ。
俺が仕入れた情報は、そっちに流すから」

「わかったわ。此方でも、何かわかったら教えるわね」

そう言つて、微笑むリンディさん。

あゝ、マジで子持ちなのが不思議だ。

ん？何でさっきから、タメ口なのかって？それは、リンディさんがそれで良いって言ったからさ！！

クロノもフェイトも、話し方がちと固いから、俺くらいはフランクに話してくれって言われたんだよ。

「了解。んで、地球に着いたら俺達は何処に住むの？」

まあ、リンディさん達が住む場所は知ってるけど、それは原作での話し。

実際、俺は他のスタッフと一緒にいるのかな？

「私達が住むのは、海鳴市のなのはさんのお家の近くよ。因みに、貴方も一緒にね」

へ？何と仰有いました、このご婦人は？俺も一緒に住む？

「えーっと・・・俺の聞き間違いだよね？一緒にs「貴方も一緒に住むのよ（ニコッ）」・・・はい」

どうやら、拒否権は無いようだ。

龍斗は諦めた。

弱いな俺！！

そんなこんなで、アースラご一行＋ と共に地球へ向かった俺達。

フェイトがご近所さんになることに、喜んでいたのはだったけど、俺がフェイト達と一緒に住むって聞いた時、物凄い形相だった。しかも、俺が睨まれたし。

（俺が悪いのか？）

フェイトはフェイトで、ずっと俺の服の裾を掴んでるし。クロノも何故か睨んでくるし。

うーむ。もしかして、俺って不幸？

で、帰ってきました海鳴市！！

フェイトとなのはが、外の廊下でキャツキャ騒いでいる。

俺とクロノ、それにエイミィとリンディさんで荷物の片付け中。

俺の主夫スキルMaxで、サクツと終わらせてやんよ！！

「それにしても、龍斗君は良いお嫁さんになるね」

「おい、エイミィ。俺は嫁に行くのか？」

「確かに、龍斗の家事スキルは抜群に高いな」

「クロノも、余計な事抜かすな」

そんなやり取りをしても、俺の手が休まることは無く。実際、既に終わっていた。

「にしても、アルフもユーノもこっちでは、その姿なんだな」

因みにその姿とは、アルフ『仔犬モード』とユーノ『珍獣モード』の事だ。

「珍獣じゃ、なあゝい！！フェレットだ！！」

「て、勝手に人の心の声を聞くんじゃないよ！！」

てな具合に騒いでいると、来客があつたらしく、リンディさんが玄関へと向かった。

俺は、リアに買い物を頼もうと別室に向かう途中で、声をかけられた。

「龍斗君、ちょっと良いかしら？」

「ん？なに？」

リンディさんに呼ばれて、玄関に行くとそこにはアリサ&すずかが居た。

二人は、物珍しそうに俺を見ている。

「なに？おやつにはまだ早いけど？」

「龍斗くん。こちら、私のお友達のアリサちゃんとすずかちゃんだよ」

俺の華麗なボケをスルーして、なのはが二人を紹介してきた。
なかなかやるな、なのは。

「アリサ・バニングスよ」

「月村 すずかです」

二人が挨拶してきたので、俺も返すことにした。

「高峰 龍斗だ。宜しくな」

と、笑顔で返した。

そしたら、二人とも顔を真っ赤にしたので、熱でもあるのかと尋ねたら、全力で否定された。
何で？

後に語られるが、この時にアリサとすずかが龍斗とに一目惚れしたらしい。

そんな状況を、廊下から見ていたリア（アウトフレーム状態）は内心、こう思っていた。

（また、マスターのハーレム要員が現れました。

マスター、恐ろしい子！！）

これが、龍斗の人生勝ち組への序曲であったことは、言うまでもない。

『海鳴市に帰ってきて、色々とフラグが立つ予感がしてるんだよ』(後書き)

龍斗「さーて、今回の更新が遅れた件についての謝罪を聴こうか？」

どら「申し訳ありません！！仕事が忙し「知るかああああ！！」・
・「ご免なさい」

龍斗「ったく。お前の私生活に関しては、まったく興味が無いんだよー！！」

リア「そうです。もっと、早く更新して下さい」

どら「え？俺に味方無し？」

ナハト「当然だな。ここまで、我等を待たせただけでなく、読者の皆様にも多大な迷惑を掛けたのだ。この程度の事は、当然の報いであろっ」

どら「俺って一体・・・」

リア「存在しなくても、良い方です」

どら「へぶし！！」

どらの急所にクリティカル のダメージ。

どらは力尽きた。

龍斗「さて、こいつの反省会は後でやるとして、いつものやるか」

龍斗&リア「今回も本編をご愛読頂き、誠に有難う御座います」

リア「つきましては、本作に対するご意見・ご感想の程を頂ければ幸いです」

龍斗「誹謗・中傷に関しましては、恐れながら厳しく対処させていただきます」

龍斗&リア&ナハト「では、次回『二度目の小学生をやるに当たって、最近の小学生は生意気なことを心得ると良いらしい』」

どら「心して見よ!!」

龍斗&リア&ナハト「生きてた（ました）!!」

『二度目の小学生をやるに当たって、最近の小学生は生意気なことを心得るとなかなか更新できなくて、申し訳ありませんでした!!』

次回は、もう少し早く更新したいと思います。

では『二度目の小学生をやるに当たって、最近の小学生は生意気なことを心得ると良いらしい』

始まります

『二度目の小学生をやるに当たって、最近の小学生は生意気なことを心得ると申

さて、やって参りました翠屋！！

現在、俺達一行（なのは・フェイト・アリサ・すずか・リンディさん・仔犬アルフ・珍獣）は高町夫妻への挨拶も兼ねて翠屋に来ていた。

んで、リンディさんはレジ付近で話し込んでいる。

俺達はオープンテラス（？）でお茶していた。

「うわーユーノくん、久しぶりだね」

「んー・・・アンタ、どこかで見たことあるような？」

なんて、すずかとアリサがアルフ達を抱えて言っている。

俺は、そんな二人を眺めつつ周囲に気を配った。

何だか知らないが、妙に見られている気がする。

「龍斗、おかわりは？」

「いや、まだ良いよ。ありがとなフェイト」

「龍斗くん、どお？翠屋の紅茶は？」

「俺は好きだな。今はダーズリンだけど、アールグレイなんかも今度、飲んでみてえな」

両隣に座ったフェイトとなのはは、さっきからチヨイチヨイ話し掛けてくる。

まあ、良いんだけど。お陰で、アリサとさすがが声を掛けるタイミングを見失っているようだ。

「龍斗くん、髪長いよねえ。お手入れとか、してるの？」

「龍斗、後で何か頼む？」

「龍斗くんって、お勉強出来るの？良かったら、私に国語とか教えて欲しいなって」

「龍斗、いつになったら料理教えてくれるの？」

「「龍斗^{くん}・・・」」

「だああああ！！ちったあ黙れ！！それと、話してる内容がバラバラ過ぎるだろがぁー！！」

俺は、軽くキレた。

いやだって、マジでこの調子だぞ。

いくら温厚(?)な俺でも、声を上げるだろ。

(殿、なのは嬢とフェイト嬢にもう少し、優しくしても善いのでは?)

(おい。俺は結構、優しい部類の人間だろ?)

(・・・)

(後で潰s(殿は最高の主のです!!)・当然だろ?)

ナハトとそんなやり取りをしていると、アリサが話し掛けてきた。

「そう言えば、高峰は何処の出身よ？」

「ん？俺か？俺は遠見だ。ただ、家庭の事情で今はリンディさん所でやつかいになってる」

「？じゃあ、今はフェイトちゃんと一緒に住んでるの？」

ここで、すずか参加。まあ、普通に考えればそこに行き着くよな。

「ああ。まあ、エイミイも一緒だし。別に不思議は無いだろ」

「それ以前に、フェイトと知り合いだった方が問題ね」

「うん。私も、同じこと考えてた」

そう言ったアリサとすずかから、何だか黒いオーラが見えた気がした。

（多分、気のせいだよな・・・フェイト、話し合わせろよ）

（え？！う、うん・・・）

俺は、念話でフェイトに一言入れといた。
さあゝて、かましますか。

「ああ・・・まあ何だ、家の両親が二年前に死んでな。
事故・・・だったらしいが、真相は俺も知らねえ。

ま、死んじまったって事実が変わらねえから、泣き言は言わねえけ

どよ。

んで、先日までは叔父きの所に居ただけだよ、叔父きも死んだんだよ。

元々、独り身で心臓が悪かったからな。

ま、いい人だったけどな。

でも、寿命だったんだろうさ。

最後は、笑ってたよ。

んで、昔からの知り合いらしい、リンディさんが拾ってくれたって訳だ。

だよな、フエイト」

俺はここまで話すと、フエイトに振った。

まあ、九割くらいは事実なんだよな。

「・・・うん」

あゝ、やっぱり微妙に暗くなっちゃったな。

でも、これで今後の追求は無いだろ。

それに、時期が来れば『俺は別の世界から来た』って事も説明しないとな。

龍斗side out

アリサ&すずかside

高峰（君）って、色々な意味で凄い奴（人）かも。

（アタシは、耐えられないな・・・）

（私だったら、きっと耐えられない・・・）

でも、だからこそ思う。

（（高峰（君）が押し潰されそうな時はアタシ（私）が支えになってあげよう！！））

アリサ&すずか side out

龍斗 side

俺が話し終えてから、アリサとすずかが何か考え込んでいた。けど、直ぐに何か決意したような瞳をしたので、俺は深くは考えなかった。

（アイツ等も、何か思うところがあったのか？
まあ、良いや。）

で、俺はアリサとすずかにさっきから感じる、違和感を伝えた。

「そお言えば、何で俺の事は苗字で呼んでんだ？

俺等、もうダチだろ？出来れば、名前で呼び合おうや。

アリサ、すずか」

俺が二人を名前で呼ぶと、二人は沸騰したかの様に真っ赤になる。
どうしたんだ？

「あ、アンタがどうしてもって言うなら。しよ、しょうがないわね。
特別に！！よ、呼んであげるわよ！！・・・りゅ、龍斗！！・・・
／／／」

と、叫ぶアリサ。

「え、えっと。それじゃあ・・・りゅ、龍斗君／／／」

すずかは控え目に、少し俯き加減で呼んできた。

「おう」

俺は、そんな二人に笑顔で答える。

やっぱ、名前の方がしっくり来るな。

龍斗 side out

なのは side

龍斗くん、何だかわたしやフェイトちゃんよりも、アリサちゃんと
すずかちゃんに対しての方が優しい気がするの。
でも、そんな龍斗くんを好きになっちゃったんだけどね。

はうゝ、モヤモヤするよ。

フェイトside

あ、龍斗の笑顔。良いなゝ。

それにしても、さっきの話し。

もしかして、本当の事なのかな？話してるときの龍斗、何だか寂し
そうだった。

今度、時間があつたら聞いてみよう。

あれ？

フェイトside out

龍斗side

そんなこんなので、なのは達と話し込んでいると、どつかで見た顔が俺達に近付いてきた。

ありゃ、アースラのオペレーターの・・・誰だっけ？

まあ、ここは『オペA』と呼ばう。

んで、オペAは何やら大きめの紙袋を持って、俺達の席まで来た。

「龍斗君にフェイトちゃん。リンディさんから、二人に渡すように頼まれたものを持ってきたよ」

そう言うと、オペAは俺とフェイトに大きめの箱を渡してきた。

「爆発しねえよね？」

「まさか（笑）。したとしても、君なら問題無さそうだけどね」

俺の軽いジョークにオペAも、笑って返す。

で、箱の中身は・・・。

「服？てか、制服か。何処のだ？」

見ると、フェイトも同じ学校の物とおぼしき制服を持っていた。まさか・・・。

「あゝ！！それ、うちの制服」

などと、なのはが叫んだ。

やっぱりか・・・。

しかも、この流れは俺も・・・だよな。

で、その制服を持ってリンディさんの所へ行く俺達。

フェイトは顔を真っ赤にして、リンディさんに「ありがとう・・・
／＼／」だって。

うはー！！その表情、ggj!!

で、俺は・・・。

「まさか、俺もガッコ行けと？」

「ええ。当然でしょ？小学生ですもの、しっかりと勉強しないと
」

などと、わかりきった返答をくれたリンディさん。

いや、当然っちゃ当然だけどさ。人生二度目の小学生って、ダルク
ね？

しかも、頭脳（知識）はアカシックレコードにアクセスすれば確実に
天才だし、身体能力もサイヤ人ですよ？

下手したら、生身で空も飛べるし（笑）

それに、ガッコ行ったら昼間、何にも行動起こせねえよ。いや、
マジで。

（まあ、いいや。昼間はリアに情報収集させつか）

俺は、今後の方針を多少変更することにした。

え？どんな予定だったかって？簡単だよ。

図書館ではやてと接触 時間を見てヴォルケンリッターと再接触
リンカーコア収集の手伝い 仮面野郎、フルボッコw

を、なるべく早い段階で実行しようと思ってたけど、じゃあ無い。

はやてとの接触は、多少ずらすか。

「龍斗くん、同じクラスだと良いね」

俺が思考の海に浸っていると、なのはが目を輝かせながら、そんな事を言ってきた。

「ん？ああ。でもよ、俺とフェイトが同時に編入だと、クラスは別になるんじゃない？」

「あゝ、それは有り得るわね」

俺のもつともな指摘に、アリサが同意する。

まあ、うちの作者がそんな当たり前な理由で俺だけ別のクラスにするとは思えないよな。

（どうなのよ、クソどら）

（おいおい、本編で私に聞くなよ。そう言うのは、後書きで答えるからさ）

（本当に答えるか？）

（・・・ごめんなさい）

てな、電波的な会話（？）をしていると、フェイトが声を掛けてきた。

「でも、一緒になれると良いね」

「そうだね。皆一緒の方が、きっと楽しいそうだしね」

「うんうん」

「ま、そうね。それに龍斗とフェイトが、どのくらい勉強出来るかも気になるし」

などと、話す面々。俺としては、何か厄介事が起きないかが心配だつたりする。

まあ、何とかなるだろ。

そんなこんなで、適当に解散して帰路に付いた。

そんでもって翌日。

俺とフェイトは『私立聖祥大学付属小学校』に来ていた。

職員室に行き、担任に挨拶。クラスを聞くと、俺達は3年1組に編入らしい。

（おい、そのまま書いたな！！）

（当然！！だって、サブタイと違ったら読者の皆様に申し訳ないでしょ？）

（この、クソヘタレが）

で、担任に連れられて俺とフェイトは3年1組にやって来た。

龍斗 side out

なのは side

朝、先生が留学生が二人来るって言ってた。

龍斗くんとフェイトちゃんかな？

回りの男の子達が「先生、男ですか、女ですか？」って、騒いでる。

先生は「男の子と女の子の二人よ」って言った。

「海外からの留学生さんです。フェイトさん、龍斗君どうぞ」

「失礼します」

「・・・」

入ってきた二人を見て、クラスの皆が驚いてる。

だって、フェイトちゃんは可愛いし、龍斗くんはカッコイイからだと思いますの。

そして、先生の隣に行ったフェイトちゃんと龍斗くん。

「あの、フェイト・テストロッサと言います。
宜しくお願いします」

「高峰 龍斗だ、適当による」

フェイトちゃんはお辞儀して、龍斗くんは右手を上げただけだった。
龍斗くん、素っ気なさ過ぎ。

なのは side out

龍斗 side

で、無事に転入した俺とフェイトは、休み時間になると早速、質問攻めにあっていた。

「向こうの学校って、どんな感じ？」

「すっげー、急な転入だよな。何で？」

「日本語上手だね。どこで覚えたの？」

「前に住んでたのって、どんなところ？」

「髪長げーよな。オカマ？」

「目付き悪いな。遺伝？」

「てか、日本人なのに留学生って何で？」

「背高いけど、何かスポーツやってるの？」

いや、フェイトに聞いてるであろう質問は良いとして、俺のはどお
よ。

焼き入れる？

「はいはい。転入初日の留学生を、そんなに皆でわやくちやにしないの」

と言って、アリサが近付いてきた。流石、仕切り魔！！

「アリサ・・・」

お？フェイトが助かったって顔してるぞ。

「それに、質問は順番に。フェイトも龍斗も困って」「いや、俺は別に」・・・困りなさいよ！！」

いやゝ、そう言われる方が困るんだが。

「だってよ、俺の質問なんて僻みか妬みにしか聞こえねえし」

「龍斗・・・」

フェイトが、不安そうに袖を掴むが、ここはあえてスルー。

「それによ。これ以上、俺に下らねえ事ぬかしたら、はっ倒すぞ」

俺は、シグナム達に向けた殺気の1/100位を、ナマ言ってた奴等に向けた。

すると、そいつ等は黙ったので、この場は良しとした。

そんでもって、昼休み。

俺は、弁当をフェイトに渡すために席へ向かった。

何で、俺がフェイトの弁当を持ってるかって？

そいつは、俺が作ったからさ！！

「フェイト、ほれ」

俺は、そう言うのとフェイトに弁当箱が入った包みを差し出した。フェイトはそれを受け取って、大事そうに抱えて。

「ありがとう。龍斗」

うっは。とびっきりの笑顔っすか！！

場合によっては、鼻血もんだぞ。

「気にすんな。ついでだ」

てな会話をしていると、なのは達が一緒に昼食を取ろうと誘ってきた。

その日の放課後に、俺の下駄箱に『不幸の手紙』らしき物があつたが、近くの柱から覗いていた連中（俺に下らねえ質問をした奴等だと思つ）を睨み付けたら、その後は何も無かった。

（ビビるなら、最初からやるなよガキが。・・・って、今は俺もガキか）

そして、龍斗とフェイトの転入後『美男・美女が舞い降りた』と学校中が大騒ぎになっていたらしいが、龍斗は知る由もなかった。

『二度目の小学生をやるに当たって、最近の小学生は生意気なことを心得ると

龍斗「おい。サブタイの内容と違くないか？」

どら「多分、大丈夫だと思いたい・・・」

リア「内容が違ふことには、気が付いているようですね」

龍斗「ああ。でもよ、この量書くのに時間掛けすぎじゃね？」

リア「そうですね。私も、失望しました」

どら「ちょっ？！何で今回は、そんなに虐めるの？」

リア「だって、私の出番がありませんでしたから」

龍斗「俺は、いつもの事だ」

どら「いゝよ。だ・・・いじけてやる！！」

龍斗「さて、うとうしいのも消えたしやるか」

龍斗& a m p・リア「今回も本編をご愛読頂きまして誠に有難う御座います」「」

龍斗「つきましては、皆様からのご意見・ご感想の程を頂ければ幸いです」

リア「尚、誹謗・中傷に関しましては厳しく対処させて頂きますの

でござ承下さい」

龍斗&リア「では、次回『彼等の戦う理由をもっと知りたいから、色々な場所から覗き見して逮捕される作者はいるのかな？』」

ナハト「心して見よ!!」

どら「ナハト、次の次くらいには出番増やすよ・・・きっと、多分」

ナハト「どちらだ!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8859/>

魔法少女リリカルなのは～舞い降りし翼～

2010年10月16日13時23分発行